

# ニュースレター

日本生態学会各賞候補者募集 .....	1
第 69 回日本生態学会福岡大会（ESJ69）開催について .....	5
第 68 回日本生態学会岡山大会（ESJ68）開催報告 .....	5
記事	
I. 一般社団法人日本生態学会 2021 年度定時総会、代議員会、各種委員会において 報告・承認・決議された事項.....	8
A. 報告事項.....	8
B. 審議事項.....	18
II. 第 68 回日本生態学会大会記録.....	23
III. 業務執行理事の選任について.....	26
IV. 功労賞受賞者.....	26
V. 書評依頼図書.....	26
VI. 寄贈図書 .....	26
書評.....	26
日本生態学会役員・代議員・委員一覧.....	28
京都大学生態学研究センターニュース .....	31

# 日本生態学会各賞候補者募集

## 第20回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

## 第26回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

## 第15回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

## 第10回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々5万円の賞金が贈呈されます。

### 記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<https://esj.ne.jp/esj/>) よりダウンロード
3. 送付先：

(郵送) 〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8  
日本生態学会事務局気付  
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長  
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)

(電子メール) [office@esj.ne.jp](mailto:office@esj.ne.jp)

4. 締め切り日：2021年8月16日(月) 必着

\* 日本生態学会は受賞者のダイバーシティ推進に積極的に取り組んでいます。

## 日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

## 日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

### 日本生態学会大島賞細則

第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

### 日本生態学会奨励賞（鈴木賞）細則

第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。

第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候

- 補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

## 第 69 回日本生態学会福岡大会 (ESJ69) 開催について

2022 年 3 月開催予定の第 69 回日本生態学会大会 (福岡) については、新型コロナウイルスの感染拡大にともなう社会状況に鑑み、従来型の対面のみでの大会開催に代えて、対面とオンライン両方の要素をもった「ハイブリッド形式」での開催を検討しています。一般口頭発表・ポスター発表、英語口頭発表を完全オンラインで行ない、シンポジウムや自由集会对面形式とオンライン形式を併用しながら行なう予定です。会期は、2022 年 3 月 15～19 日の予定ですが、開始を一日前倒しし、2022 年 3 月 14 日～19 日となる可能性もあります。具体的な開催形態や会期が決定しましたら改めてお知らせいたします。



## 第 68 回日本生態学会岡山大会 (ESJ68) 開催報告

幸田良介 (大会企画委員会 前委員長)

第 68 回日本生態学会大会 (ESJ68) は、新型コロナウイルスの感染拡大状況を鑑み、日本生態学会始めて以来初の完全オンラインというかたちで、2021 年 3 月 17 日 (水) から 21 日 (日) までの 5 日間にわたり開催されました。大会の準備と運営を担う両輪である大会実行委員会と大会企画委員会にとっても、当然ながら初めてのことが多く、一つずつ手探りで対応を進めていくことになりました。参加・講演くださった会員のみならずにとっても分からない部分が多く、戸惑われる場面が多々あったことと思います。大会初日のポスターアップロードの不備など、オンライン開催にともなういくつかのトラブルがあり、ご迷惑をおかけしてしまった部分もありましたが、全体としては何とかスムーズに大会を終えることができ、胸をなでおろしているところです。これもひとえに参加者のみなさま一人一人のご協力のおかげだと感じております。本当にありがとうございました。

今回の大会は、例年に比べると集会数や講演数が全体的にやや少ないものとなりました。おそらく、コロナ禍の中で思うように研究を進められなかった方が多かったことや、オンラインでの発表に躊躇される面があったことなどが影響したためだと思われます。それでも、48 件の集会 (シンポジウム・自由集会・フォーラム) と 932 件の一般講演 (ポスター・口頭) が行われ、高校生ポスターでは 35 件の発表がありました。また、キャリア支援専門委員会によるキャリア支援相談室や、将来計画専門委員会による新たな試みであるモアイ企画が行われ、懇親会やエコカップもオンライン開催の中で工夫を凝らしながら、うまくかたちを変えながら開催いただくことができました。これらの工夫や努力の甲斐もあつてか、比較的少ない講演数にもかかわらず、最終的な大会参加者数は約 2800 人と、東京大会 (ESJ64) や神戸大

会 (ESJ66) と同等の過去最大規模のものとなりました。参加者の中では、特に聴講のみの学部以下の学生の参加が大きく増加していました。参加費が無料で、オンライン開催のために旅費もかからなかったことが大きな要因になったのだと思われます。また、公開講演会にも約 700 名と、過去最多の参加をいただくことができました。こちらも参加費や旅費がかからなかったことや、現地開催に比べて会場のキャパシティにも余裕があったことが幸いしたのでしょうか。これからの生態学の発展を担う存在となる若い方々に多数の参加をいただけたことや、公開講演会にて一般市民の方々にも多数聴講いただけたことは、日本生態学会にとって大きな財産になったのではないかと思います。この点は、オンライン開催のメリットであったと言えそうです。これを含め、今回の大会ではオンライン開催の長所を強く感じた面がある一方で、オンライン開催ならではの難しさや物足りなさを感じた方も多かったのではないのでしょうか。以下では、大会の準備・運営に携わった一人として、オンライン開催に至った経緯や方針を簡単にご説明するとともに、今回の開催で感じた課題について整理してみたいと思います。

### オンライン開催の経緯と基本方針

今大会の本格的な準備は、昨年 4 月、1 回目の緊急事態宣言が発令される中で始まりました。3 月中は残念ながら中止となってしまった名古屋大会をうけて、会場予定だった岡山コンベンションセンターのコンパクトさも勘案しながら、いかにして円滑に現地開催ができるかということばかりを考えていましたが、徐々に悪化する感染拡大状況の中で通常の現地開催はとて不可能であろうという気持ちが大きくなっていきました。一方で、大会の開催形態を大きく変えるような決定を大会企画委員

会のみで行えるわけもなく、当然ながらオンラインで各セッションを行うためのノウハウもないことから、先行きへの不安感だけが徐々に増加していました。そのような中で、吉田丈人大会担当理事らのはたらきかけで、大会実行委員会、大会企画委員会のみならず、湯本貴和会長をはじめとする学会執行部までも含むかたちで「ESJ68 運営検討タスクフォース」を設置いただきました。そして5月14日の初回の会議の時点で、現地開催が難しいという認識を共有し、全面的なオンライン開催という方向性で進めていくことが決まりました。

現地開催とオンライン開催の両方の可能性を視野に入れながら準備を進めていくことは、基本的にボランティア組織である両委員会にとっては非常に困難なことです。また、オンライン講義への対応など、委員それぞれが持つ本務においても、コロナ禍にあって通常にはなかった負担が増大している状況でした。この時点での決断に対し、早すぎるという批判をお持ちの方もいらっしゃったかもしれませんが、準備を進めていく身としては大変ありがたいものでしたし、実質的にはオンラインでの開催方法を一から構築し、そのための準備を進めていくためにはギリギリのタイミングだったように感じています。その後も計7回にわたりタスクフォースでの議論を積み重ねながら、企画委員会内の各部会で様々に対応方法を検討いただき、なんとかオンライン大会の全体像を固めていきました。

今回のオンライン開催では、一般講演や各種集会などの各セッションについて、できる限り従来の現地開催での枠組みを崩さないという方針で、開催方法を検討していきました。また、従来の学会大会らしさをできるだけ損なわないようにという観点から、集会や口頭発表については基本的にリアルタイムでの講演というかたちをとりました。従来通りの枠組みを維持するという基本方針は、準備を進めていく側としても見本となるものがあり、判断の参考となる過去の事例があるという点で助けとなりました。また、参加者のみなさまにとってもオンライン大会という初めての状況の中で、これまでの経験を参考にできるという面で参加しやすい土台となったのではないかと感じています。一方で、これらの基本方針に縛られてしまったために、オンライン開催のメリットを活かしきれない面や、生じてしまった課題もありました。

例えば、通常通りのリアルタイムでの講演としたために、海外からの参加者に対しては時差の問題が生じてしまいました。シンポジウムと口頭発表の開催時間帯を入れ替える日程を設けるなど、可能な範囲での対応を検討したものの、早朝や深夜の講演をお願いすることになってしまった部分は少なからず残ってしまったかと思えます。この点も影響したのか、今大会では海外からのER招待講演者をともなうERシンポジウムの申込がないなど、これまで進められてきた国際化の面で課題を残してしまった部分があります。また、ポスター発表では従来通り好きなタイミングでポスターファイルが閲覧できるかたちをとり、コアタイムの時間帯も設定したものの、従来のような活気あふれるポスター会場という雰囲気にはなかなか至らなかつたように感じています。個人的に

Zoom ミーティングを用意して、口頭での説明時間を設けるなど工夫してくださった方も少なからずいらっしゃいましたが、参加者からすると従来のコアタイムのように気軽に発表を聴講し、感想を述べあうという状況ではなかつたように思います。この点では、ポスター発表という枠組みをある程度崩すようなかたちでの対応も検討していく必要があるのかもしれませんが。

## 今後の大会に向けて

大会の魅力が、最新の研究成果や取り組みをいち早く知ることができるという面にあるとともに、様々な分野の研究者と新しいつながりをつくることのできる研究交流の機会という面にあることは、多くの方が認識されていることかと思えます。私自身も、大会での出会いと冗談のような雑談から、思いもしなかつた共同研究へと発展したという経験が何度もありますし、同様の経験は多くのおみなさんもお持ちのことと思います。今回の大会では、上記のポスター発表での課題にも関係しますが、この研究交流という面において大きな課題が残りました。

様々な研究発表を聴講するという面だけで言えば、スライドをパソコンの全画面で大きく見ることができ、会場に入りきれず廊下からのぞき見することもなく、会場の移動もボタン一つで行うことができるなど、オンライン開催には現地開催にはない利点が多々ありました。普段は育児や業務の都合から、なかなか大会に参加できない方にとっても、長期出張が不要なオンライン大会は参加のハードルがぐっと下がったことと思います。一方で、大会の醍醐味ともいえる交流の機会については、十分に用意することができませんでした。既にある程度の研究者間のネットワークをお持ちの方であれば、聴講後にその中で議論することもできたかと思えますが、今回初めて参加や発表をされた学生の中には、ほとんど何の議論をすることもなく大会が終わってしまった方もいらっしゃったかもしれません。それどころか、これが異常事態であり、機会の損失であったこと自体を認識されないままに大会が終わってしまった可能性すらあります。特に若手のおみなさんの交流の機会が失われ、研究者間の新たなつながりをつくることができなくなることは、ご本人のこれからのキャリアのためにも、生態学の将来的な発展のためにも大きな損失であり、大変申し訳なく思っております。今回は何とかオンラインでの開催形態を整え、円滑な大会運営を行うことだけで手一杯になってしまったというのが本音ですが、オンラインのメリットを活かしつつ今回の課題を解決していくことが、ポスト・コロナ禍の大会運営の中で求められるものになるのだろうかと思っています。あるべき研究交流の機会は、やはり現地開催での対面交流でないと成しえないというご意見もあるでしょう。一方で、日々発展するオンラインツールによって、交流面での課題についても大部分が解決するようになるのかもしれませんが。2020年6月3日の湯本貴和会長からのメッセージには、今回の大会を近い将来の社会革新を見据えてノウハウを蓄積するための好機としたい、という言葉がありました。今回得られたノウハウや反省点を委員会内でうまく引継ぎ、生態学会大会がさ

らに魅力あるものとなるように、努めていきたいと考えております。

ワクチンの接種が進む一方で感染拡大がなかなか落ち着かない昨今の状況において、次回のESJ69福岡大会については現地開催とオンライン開催の双方を視野に入れながら、今大会以上に難しい舵取りを迫られることになりそうです。既に今大会と同様に、福岡大会の開催形態等を議論するための「ESJ69運営検討タスクフォース」が設置され、執行部を含めた議論が開始されています。そして粕谷英一大会会長、佐竹暁子大会実行委員長、高橋佑磨大会企画委員長を中心に、今大会の反省点も踏まえながら様々な検討が進められています。具体的な開催方法についてはこれからの議論を待つこととなりますが、状況によっては会員のみなさまにご不便やご負担をおかけする場面も出てくるかもしれません。ここで改めてみなさまにご認識いただきたいのは、膨大な作業を必要とする大会の準備と運営が、会員のボランティアによって行われているという事実です。大会実行委員会も大会企画委員会も、委員の一人一人はみなさまと同じ会員であり、本務をかかえながらも大会準備に尽力くださっています。どうしても行き届かない面やご期待に沿えない面が生じてしまうことがあります。どうか会員のみなさまにはあたたかいご支援と、ご理解ご協力をお願いしますと幸いです。

生態学会大会については、ESJ69のためのタスクフォースのみならず、中・長期的な大会のあり方の検討を視野に入れた「大会将来像検討タスクフォース」の設置が2021年3月21日の理事会にて承認されました。オンライン要素の取り込みを含め、今後も様々な検討がなされていくことになるかと思えます。ぜひ会員のみなさまにも、未来志向の新しいかたちの学会大会を創っていくために、ご協力をいただけますようお願い申し上げます。

## 謝辞

最後になりましたが、今大会の準備と運営にあたりお世話になった以下の方々へ厚く御礼申し上げます。

宮竹貴久大会会長、廣部宗大会実行委員長、宮崎祐子大会実行副委員長をはじめとする岡山大会実行委員会のみなさま、各部会長（酒井陽一郎運営部会長、兵藤不二夫発表編成部会長、吉村真由美シンポジウム部会長、高橋一男ポスター部会長、高木俊高校生ポスター部会長、藤井佐織英語口頭発表部会長）をはじめとする大会企画委員のみなさま、学会執行部、事務局のみなさま

奨励賞（鈴木賞）受賞者に副賞を提供して下さったワイリー社

審査員を務めて下さったみなさま（順不同、敬称略）  
ポスター賞：角田裕志、伊藤健二、山崎一夫、早坂大亮、生方正俊、今野浩太郎、太田謙、大窪久美子、藤井一至、平吹喜彦、大澤隆文、安房田智司、石川麻乃、佐藤成祥、小山里奈、上田実希、小柳知代、橋本佳延、小林和也、直江将司、小坂井千夏、田中草太、伊藤健二、橋詰茜、加藤義和、内海俊介、鈴木節子、斎藤琢、内藤和明、佐伯いく代、岩泉正和、金尾滋史、深澤遊、大津千晶、橋本徹、徳田誠、大脇淳、西尾孝佳、水本寛基、川西基博、岸本圭子、原野智広、中原亨、福森香代子、岡浩平、磯村尚子、佐藤光彦、小北智之、鈴木紀之、石崎智美、濱尾章二、小山明日香、宇野裕美、田和康太、石井潤、西野貴子、佐橋玄記、今田省吾、水澤玲子、井上みずき、森井悠太、前迫ゆり、栗和田隆、田村繁明、石川幸男、中井静子、伊藤浩二、佐々木尚子、河合清定、平岩将良、伊藤萌、奥山雄大、安部淳、半場祐子、稲永路子、小口理一、高須賀圭三、辻祥子、辻かおる、深谷肇一、寺田佐恵子、青木かがり、庄山紀久子、西野貴子、他匿名希望42名

高校生ポスター賞：片山直樹、北沢宗大、鬼頭健介、木村彰宏、駒田夏生、佐伯泰河、佐賀達矢、櫻井麗賀、嶋田正和、城野哲平、田邊智子、中林ゆい、中原亨、西脇亜也、畑田彩、平山大輔、牧貴大、孫田佳奈、三宅崇、宮崎佑介、宮田理恵、望月昂、横溝匠



## 記事

I. 一般社団法人日本生態学会 2021 年度定時総会（第 68 回大会会員総会、21 年 3 月 20 日、代議員 21 名・委任状提出代議員 1 名・会員 95 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

### A. 報告事項

#### 1. 事務局報告

##### a. 2020 年度会員数・学会誌発行状況

日本生態学会誌 70 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	1960	1950	1960
配本部数	1932	1911	1911
残部数	28	39	49

保全生態学研究 25 巻

	1 号	2 号
発行部数	1050	1050
配本部数	1017	983
残部数	33	67

Ecological Research Vol.35

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	115	115	115	115	115	115
配本部数	115	113	114	113	112	112
残部数	0	2	1	2	3	3

会員数

	2019 年 12 月末現在			2020 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	248	152	400	256	148	404
東北	166	102	268	167	110	277
関東	997	405	1402	993	419	1412
中部	370	169	539	366	176	542
近畿	473	328	801	459	345	804
中四国	188	66	254	192	63	255
九州	221	92	313	220	93	313
外国	43	32	75	47	29	76
小計	2706	1346	4052	2700	1383	4083
賛助			72			70
名誉			4			7
小計			76			77
合計			4128			4160

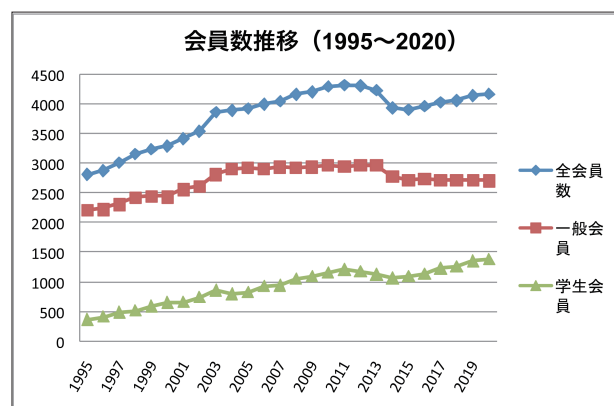
会費納入率（各年 12 月末現在）

	2019 年		2020 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	92.3	71.7	94.9	75.0
東北	94.0	71.6	94.6	79.1
関東	92.1	73.8	92.7	75.9
中部	94.1	72.8	94.3	76.1
近畿	93.7	73.5	92.6	75.9
中四国	95.2	81.8	93.2	81.0
九州	95.9	72.8	94.5	74.2
海外	67.4	34.4	74.5	24.1
全体	92.9	72.6	93.1	75.1

雑誌不要者数変遷（各年 12 月末）

	一般					学生				
	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要	会員数	生態誌不要	ER 不要	
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2582	321	12%	419	16%	952	221	23%	239	25%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	339	29%	364	31%
2012	2760	478	17%	606	22%	1135	407	36%	431	38%
2013	2757	531	19%	679	25%	1097	477	43%	501	46%
2014	2765	614	22%	789	29%	1054	495	47%	528	50%
2015	2707	623	23%	811	30%	1069	522	49%	563	53%
2016	2729	726	27%	952	35%	1130	716	63%	633	56%
2017	2713	830	31%	1054	39%	1220	783	64%	844	69%
2018	2710	964	36%	2698	99.6%	1253	896	72%	1253	100%
2019	2706	1041	38%	2684	99.2%	1346	1054	78%	1335	99.2%
2020	2700	1109	41%	2678	99.2%	1383	1134	82%	1366	98.8%
2021	2545	2458	97%	2528	99.3%	1261	1225	97%	1245	98.7%

※2013 年までは AB 会員数



##### b. 庶務報告（2020 年 4 月～2021 年 2 月）

1. 法務局に 2020 年定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された（4 月 1 日）
2. 日本学術振興会より令和 2 年度科研費（国際情報発信強化 A）の内定通知があった（H30 年度より 5 年間交付、令和 2 年度 12,600,000 円）（4 月 1 日）
3. 日本学術振興会より令和 2 年度科研費（公開講演会）について不採択通知があった（4 月 1 日）
4. 第 67 回名古屋大会総会にて決議された「高い植物多様性を擁する屋久島の低地照葉樹林の環境保全を求める要望書」を林野庁長官、林野庁九州森林管理局长、環境省自然環境局长、環境省九州地方環境事務所長、鹿児島県知事、屋久島町長宛に送付した（4 月 11 日）
5. 日本学術振興会へ令和 2 年度科研費（国際情報発信強化 A）実績報告書を送付した（4 月 28 日）
6. 過去の大会において不適切な大会参加のあった会員に会長名で注意書を送付した（9 月 23 日）
7. 学会メールサーバーを Google Workspace へ移行した（9 月 23 日）
8. 学術振興会に 2021 年度科研費（研究成果公開発表 B）計画調査など応募書類一式を送付した。（11 月 5 日）

9. 第12回 京大生態学研究センター シリーズ公開講演会「もっと知りたい『琵琶湖の深呼吸』」への後援名義の使用を会長名で許可した(11月25日)
  10. 学術振興会による科研費経理状況等の調査及び意見交換が行われた(11月27日)
  11. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞(鈴木賞)候補者が理事会メール審議にて承認された(12月7日)
  12. 再生可能エネルギータスクフォースの設置が理事会で承認され(12月19日)、準備を含めて4回の会合を実施した(2020年11月～2021年3月)。
  13. 「気象庁による生物季節観測の変更の見直しを求める要望書」を作成し27学術団体連名で気象庁長官宛に提出した。(12月23日)
  14. 学術振興会による科研費(国際情報発信強化)中間評価に係るヒアリングを受けた(1月18日)
  15. 理事会より推薦された日本生態学会功労賞候補者高村典子氏が代議員に承認され受賞決定となった(1月19日)
  16. 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構から依頼があり、機関別認証評価専門委員の候補者として生態学会より6名推薦した(1月22日)
  17. 共同利用・共同研究拠点継続要望書を会長名で京大生態学研究センター、京都大学野生生物研究センター、京都大学霊長類研究所、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、琉球大学熱帯生物圏研究センター、金沢大学環日本海域環境研究センター、鳥取大学乾燥地研究センター、新潟大学災害・復興科学研究所等、筑波大学下田臨海実験センター等、9機関に送付した(1月13日、28日、2月10日、2月24日)
  - \* 他、各種集会への後援・共催名義使用承認3件、論文図表の転載許可4件、賞・助成への学会推薦6件
- c. 会計報告(2020年3月～2021年2月)**
1. ESJ67 懇親会費キャンセル料としてホテルメルパルク名古屋へ1,600,000円を支払った(3月11日)
  2. ESJ67 託児申込者18名への返金を行った(3月12日)
  3. ESJ67 展示申込業者21件への返金を行った(3月13日)
  4. ESJ67 機器レンタル業者へのキャンセル料1,395,600円を支払った(3月25日)
  5. ESJ67 懇親会参加者214名への返金を行った(3/26～4/21)
  6. ESJ67 大会関連委託費として国際文献社に7,853,125円を支払った(5月11日)
  7. サーバーサポートチケット代金として(株)MIERUNEに550,000円を支払った(6月10日)
  8. 土倉事務所へ日本生態学会誌70-1印刷費として1,358,280円を支払った(6月18日)
  9. 土倉事務所へニュースレターNo.51編集費として142,450円を支払った(6月18日)
  10. 共立出版社より「現代の生態学8 森林生態学」印税として237,864円の入金があった(6月19日)
  11. ESJ68 会場費(岡山国際交流センター)キャンセル料として1,080,000円の入金があった(7月9日)
  12. 国際文献社へ4-6月会員管理委託費として3,198,521円を支払った(7月10日)
  13. 国際文献社へ会員管理委託費4～6月3,198,521円を支払った(7月10日)
  14. Wiley社へ2020年英文3誌出版費および2019年・2020年冊子代金として2,061,286円を支払った(7月21日)
  15. 東京化学同人より生態学入門第2版印税として428,960円の入金があった(7月22日)
  16. ESJ68 公開講演会補助金として八雲環境科学振興財団より300,000円の入金があった(7月29日)
  17. 土倉事務所へ保全生態学研究25-1印刷費として1,120,350円を支払った(8月18日)
  18. 2020年地区会活動費として7地区会に計1,944,087円を支払った(前年会費収入の6%のうち50%等分配、50%会員比分配)(8月19日)
  19. 科研費(国際情報発信力強化)前期分として6,600,000円の入金があった(8月28日)
  20. 科研費(国際情報発信力強化)後期分として6,000,000円の入金があった(10月30日)
  21. 東京化学同人より生態学入門第2版印税として378,560円の入金があった(11月25日)
  22. 土倉事務所へ日本生態学会誌70-2印刷費として450,450円を支払った(11月30日)
  23. 土倉事務所へニュースレターNo.52編集費として80,850円を支払った(11月30日)
  24. みずほファクターより2021年会費口座自動引落分として3,441,000円の入金があった(12月14日)
  25. 学術著作権協会より2020年度複製使用料分配金として181,734円の入金があった(12月17日)
  26. 土倉事務所へ日本生態学会誌70-3印刷費として1,207,360円を支払った(1月14日)
  27. 土倉事務所へ保全生態学研究25-2印刷費として1,247,400円を支払った(1月14日)
  28. 国際文献社へ会員管理委託2020年10-12月経常費用790,688円を支払った(1月14日)
  29. 2020年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。(2月6日)
  30. 2020年法人税として267,400円を納税した(2月8日)

## 2. 大会企画委員会

### 一般講演・各種集会開催状況

回	開催地	一般講演			高校生ポスター	集会				
		ポスター	口頭	合計		シンポ	フォーラム	企画集会	自由集会	合計
59	大津 (EAFES)	1130	277	1407	35	26	5	20	32	83
60	静岡	894	211	1105	26	13	6	17	36	72
61	広島	944	214	1158	55	17	7	25	30	79
62	鹿児島	866	166	1032	29	12	11	19	29	71
63	仙台	914	251	1165	40	4	13	24	37	78
64	東京	955	264	1219	52	14	9	17	35	75
65	札幌	899	216	1115	45	19	7	17	29	72
66	神戸	918	269	1187	81	21	12	-	32	65
67	名古屋	928	295	1223	60	31	7	-	29	67
68	岡山・(オンライン)	708	224	932	35	17	11	-	20	48

- ・全体的に講演数、集会企画数が減少
- ・ポスター賞応募 (410件) の割合がやや増加 (約53%→約58%)

回	開催地	参加者			
		一般 (有料)	学生 (有料)	その他	合計
61	広島	1278	684	502	2464
62	鹿児島	1104	661	330	2095
63	仙台	1241	686	469	2396
64	東京	1262	828	724	2814
65	札幌	1140	745	421	2306
66	神戸	1187	816	796	2799
67	名古屋	874	734	299	1907
68	岡山	1110*	799	888	2797

- ・参加者数は最大規模になる見込み
- ・締切直前に大きく増加  
2/7:1400 → 2/11:1600 → 2/14:1900人
- ・締切直前のアナウンス (jeconetでの集会企画者の協力) と、締切延長 (地震対応) が奏功した。
- ・自由集会聴講券利用者もやや増加  
神戸: 57 → 岡山: 65
- ・聴講のみの学部以下学生 (参加費無料) 数は過去最大  
東京: 約410 → 岡山: 約530

### オンライン化までの経緯

- 4月中旬 感染状況を不安視しながらも現地開催用の準備を進める。大会案内第1報の作成、大会ホームページの構成検討 → お蔵入り
- 5月上旬 開催方法の検討を開始 (各部会に広く意見出しを依頼)。吉田理事から開催方法検討の場の設置について執行部へはたらきかけ  
→ 「ESJ68 運営検討タスクフォース (TF)」の設置  
TF参加者: 会長、副会長、執行部、関係理事、大会会長、正副実行委員長、正副企画委員長、各部部长、事務局、国際文献社
- 5/14 第1回TF 現地開催が難しいことを共有、オンライン開催をまず理事会に諮る
- 5/30 第2回TF 理事賛同を確認、各部会で出た意見のとりまとめ、他学会の動向や使用ツール情報の収集を進めることに

- 6/5 第3回TF 各部会から収集情報や意見などの報告、フリーディスカッション (検討課題の洗い出し) → 大会案内を作成しながらここまでの意見を整理する
- 6/19 第4回TF 大会案内 (新第1報) で各行事の大枠を確認、使用ツールの検討、各行事に関する懸念事項の議論 (ER招待、ポスターと口頭のすみ分け、賞審査など)
- 7/7 第5回TF 大会予算案の検討、使用ツール絞り込み、懇親会開催方法の検討
- 7/11 理事会にて大会案内を用いてオンライン開催の概要を報告 → 大きな方向性の承認
- 7/28 第6回TF 大会会場として用いるツールの検討 → Confitをテストし、採用を決定  
大会案内第2報を作成しながら細部を固めつつ、検討事項を洗い出す
- 7月末 大会案内 (新第1報) 公開
- 8/25 第7回TF 大会案内第2報でオンライン開催の設えを確認、参加費設定の検討、Zoom関係の業者委託を確認、その他継続検討課題の議論
- 9月末 大会案内第2報公開  
オンライン大会の形態の確定を受けて、TF会議は終了
- 11/2 講演・集会企画申込締切
- 11月中 発表編成、タイムテーブルの調整
- 12/25 大会プログラム (講演情報など) 公開
- 1/21 諸案内・注意事項公開
- 2/17 大会参加申込・要旨登録締切 (2/15から延長)
- 3/1 大会参加費支払締切
- 3/4 Zoomリハーサル開始 (3/10まで各日実施予定)
- 3/5 大会ポータルサイト (大会会場) の公開、ログインID/PWの送信
- 3/17 ~ 大会開催、ポータルサイトは4/5 AM9時まで公開

### ○反省事項・今後の課題

#### オンライン化に向けた議論 (TF関係)

- ・大会開催方法の大きな変更をどのように意思決定すべきか分からない中で、会長・執行部までを含むTFの設置は心強くありがたかった。
- ・5月半ばの段階で、早々にオンライン開催に一本化できたことは準備面で助かった。
- ・今後また現地開催ができることも見越して、大会の大枠は崩さないかたちでのオンライン化を図ることとなった。参加者への分かりやすさや、要検討事項の判断基準となる面で良かったが、オンラインの利点を活かしかねない面もあったように思う。
- ・設定上オプザバーという扱いながら、議論の中心となる各行事の運営方法の検討については、各部部长に (当然各部部长のみなさんにも) かなりの負担をおかけした。特に、口頭発表とポスター発表の開催方法については、本来の部会のお仕事の範囲を超えて対応いただくことになり、大変申し訳なかった。
- ・大会案内の作成過程でなんとかまとめていったが、や

はりそれぞれの立場から意見が異なる部分が多々あり、議論が進まない場面も多かった。

- ・実行委員会と企画委員会の役割分担は、何度か議題に上がりながらも完全には詰め切れなかった。実行委員会には大会当日の運営に関わる部分を中心に担っていただきつつ、細かな部分は結局実行委員長の廣部さんと都度相談しながら、進めていった。

#### 今後の大会に向けて（オンライン開催）

- ・都度手探りで決めていかざるを得ない部分が多く、システム化できていない部分が多々ある。申込システムに組み込める部分などを検討し、省力化を図る必要がある。
- ・旅費がかからない反面、時差問題が生じる点が海外講演者との間の検討事項として残った。タイムテーブルの調整である程度のカバーを目指したが、そもそもの海外講演者の申込が少なかった。国際化という面で、大きな課題となりそう。
- ・いつものプログラム（冊子・PDF）を作らなかったこともあり、大会ホームページの重要度が高まった。事務局を中心に、担当者の負担軽減を検討する必要がある。

#### 今後の大会に向けて（現地開催）

- ・今回オンライン開催のノウハウをある程度確立できた反面、現地開催のノウハウの引継ぎは途切れた状態となった。再度現地開催に切り替わった際に、うまく引継ぎができるのが不安。
- ・本来は実行委員会と調整しながら進める必要がある部屋割りは、ほぼ企画委員会内での調整のみで決定した。実行委員会との現地合同検討会も見送った。Wikiもほとんど使っておらず、プログラム冊子の作成・校正の経験値も不足した状態・・・
- まずは次回、そして今後の大会開催方法の早めの決定と、それに合わせた対応の検討やノウハウの適切な引継ぎが必要

#### 各部会報告

##### ○運営部会

- ・オンライン開催にともない、準備スケジュールの大幅変更、大会ホームページの役割強化などに対応。
- ・オンライン開催に対応した説明の追加など、問合せ対応の検討が必要。
- ・正誤表を用いた発表申込の抜け道対策として、正誤表入力画面の改修が必要。

##### ○シンポジウム部会

- ・ESJ67の中止をうけて、シンポジウム招待講演者の例外的対応を実施。
- ・今回、ERシンポジウムの応募はゼロ。オンライン開催では旅費の支給というメリットを享受できないこと、時差の問題などがあり、今後の開催形態の検討が必要。

##### ○ポスター部会

- ・オンライン開催にあわせて審査スケジュール等を調整。
- ・スペースの問題がなくなったことから一般ポスターは制限なしとしたものの、賞審査ポスターは審査員への負担を考えて500件までの上限を設定。
- ・審査集計システムのシステム管理を担う部会員への負担軽減や、今後の長期的な対応が課題。

##### ○高校生ポスター部会

- ・応募数がやや低調。従来告知の機会となっていたSSHの発表会等の大半が中止となったことが一因の可能性。告知方法の検討が必要。
- ・ポータルサイトへのログインID付与のため、発表申込とは別に参加する学生の情報収集を実施。作業負担の低減や申込手順の簡略化が課題。

##### ○発表編成部会

- ・口頭発表という枠組みとそのメリットを維持するため、Zoomミーティングでのオンライン開催という方法を選択。
- ・同じく口頭発表を行うセッションであるEPA部会と密に連携を取り、プログラム編成等を実施。

##### ○英語口頭発表賞（EPA）部会

- ・オンライン開催の中でどのように対応するかを議論した結果、聴衆参加型の投票によって受賞者を決める「英語口頭発表聴衆特別賞」の開催を決定
- ・オンラインでの対応として、従来の座長に加えて座長補佐を各セッションに設置。審査補助のほか、回線トラブル等への対処を担当。

（文責：幸田良介）

### 3. Ecological Research 刊行協議会

#### 【総会に報告すべき事項】

##### 1. 出版状況（2020年第35巻1～6号の報告）

- ・計1119ページ115報を出版。投稿数263、受理数99（採択率34.6%）。
- ・投稿数263は減少傾向（2019年307、2018年342、2017年536）。
- ・日本からの投稿数（78）は前年並。採択数は最多（56）。
- ・投稿からFirst Decisionまでは平均37.3日。前年値（48.6）より改善（1ヶ月以内を目指す）。
- ・IF値（2019）は1.580に上昇（2018年1.546、2017年1.531、2016年1.283）。
- ・オープンアクセス（OA）論文は22報（さらに増加が望ましい）。

##### 2. 編集体制

- ・9名の新任、8名の退任
- ・新規編集委員、特に海外編集委員を募集中。

##### 3. Ecological Research Award 2020 受賞論文選考

- ・編集委員・幹事の投票により4論文を選考し、理事会の承認を経て決定した。

#### 4. 特集企画 (計画)

- ・36巻6号に1特集予定。2特集の計画は延期(大会延期のため)、1特集を年内に募集予定。
- ・特集延期のため、今後掲載論文数が不足する可能性が高い。特集の企画立案、論文投稿をお願いしたい。
- ・地区会のオンライン企画集会等からの特集企画等も歓迎する(→OA費補助等を検討)。
- ・(参考情報)特集内の1報は生態学会負担でのオープンアクセスになる。



#### 5. Author Guidelinesの一部変更等

- ・データペーパーの要旨字数、キーワード個数に関する軽微な修正を行った。
- ・プレプリントの事前登録を認める記載を明記した。
- ・Free format submissionについて意見募集中。

#### 【総会の報告を要しない事項】

- ・生態学会各賞受賞者・これまでのシンポ企画者で、受賞記念論文(総説)、ERシンポジウム論文(総説)が未投稿の皆様には、速やかな投稿をお願いします。
- ・投稿規定・図表ガイドの日本語版を作成中。

(文責：陶山佳久)

#### 4. 日本生態学会誌刊行協議会

刊行協議会を2021年3月16日にオンライン開催しました。16名の編集委員長・幹事・委員と事務局生態誌担当が参加しました。

#### 【報告事項】

**発行状況**：71巻1号を2021年3月に発行します。投稿規定改定とオープンアクセス化により目次、記事、奥付の体裁を更新します。

#### 70巻(2020年)発行状況

	原著	総説	特集	学術情報	連載	その他	合計	頁数
1号	1	1	2(9編)	2	2	1	16	133
2号	0	0	1(3編)	3	2	0	8	27
3号	1	1	1(5編)	0	1	0	8	102
計	2	2	4(15編)	5	5	1	32	262

#### 編集状況(2021年2月)

受付年 企画数	段階	一般記事と巻頭言				特集				連載 合計
		原著	総説	情報	コメ	原著	総説	情報	コメ	
2019	審査中	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特集4	却下	2	1	0	0	1	0	0	0	4
連載3	受理	1	1	4	2	7	7	5	6	33
	合計	3	2	4	2	8	7	5	6	37
2020	審査中	1	1	0	0	1	2	5	2	12
特集4	却下	1	2	0	0	0	0	0	0	3
連載3	受理	2	0	1	1	0	1	6	2	17
	合計	4	3	1	1	1	3	11	4	32
2021	審査中	0	0	0	0	0	0	0	0	1
特集0	却下	1	0	0	0	0	0	0	0	1
連載3	受理	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	1	0	0	0	0	0	0	0	2

**編集幹事の変更**：理事会(2020年12月)で、4名の幹事を選任しました。

**リニューアルの経緯**：理事会(2020年7月)で、投稿規定の改定、および冊子制作費の学会負担から購読者負担への切替えが承認されました。和文誌のオープンアクセス化への意見が募集されましたが、特に反対意見は寄せられませんでした。そこで、2021年から、バックナンバーも含めてすべての記事にCC BY 4.0の再利用ライセンスを適用します。また、冊子購読費の値上げを想定した冊子購読希望会員数を調査した結果、2021年から冊子300部を発行することになりました。さらに2022年からの年2号発行への会誌刊行規定の改定、および冊子の価格変更にとまなう入会・会費規則の改定案が理事会(2021年2月)で承認され、入会・会費規則の改定案が総会(2021年3月)に提出されます。冊子購読会員は年間2,000円、一般販売は2,500円/冊となります(保全誌と同じ価格設定です)。発行号数が減るので、プレプリントなどを活用した早期公開と、特集記事の柔軟な掲載(受理が遅れている原稿の扱い)について今後検討します。

(文責：永光輝義)

#### 5. 保全生態学研究刊行協議会

オンライン会議 3月16日(火) 15:00~16:00

1. 2021年3月20日 フォーラム「応用マクロ生物学の展望」

会員外からの投稿も可能になったための事業

#### 編集状況

1. 2021年1月~3月

	原著論文	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	巻頭言 学術提案・	計
2021新規投稿	1	0	1	1	0	0	2	5
受理	0	0	0	0	0	0	1	1
却下・取下げ・ 話題不適當	0	0	0	0	0	0	0	0
審査中	1	0	1	1	0	0	1	4

## 2. 2020年

	原著論文	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	巻頭言 ・ 学術提案	計
2020 新規投稿	20	3	16	3	0	2	1	45
受理	7	1	7	3	0	1	0	19
却下・取下げ・ 話題不相当	2	0	2	0	0	0	0	4
審査中	11	2	7	0	0	1	1	22

2019年新規投稿数 34 編：受理 29 編、却下・取り下げ 3 編、審査中 2 編

2018年新規投稿数 25 編：受理 20 編、却下・取り下げ 3 編

(文責：小池文人)

## 6. 自然保護専門委員会

日時：2021年3月3日 9:00 - 12:00 リモート会議にて開催

出席者：露崎・長谷川・黒沢・星崎・亘・奥山・増田・和田・野間・中井・岡・伊谷・久保田・高嶋・平田・増沢・加藤・清水・横畑・阿部・吉田・常田・角野・水谷・神山・大久保・五箇 (27名)

### 【審議事項】

- 2020年度事業の決算について
- 2021年度事業計画及び予算（アフターケア活動費用等：100,000円）
- 自然保護専門委員会 HP の作成：後日詳細を審議し決定。
- 新専門委員の設立についての提案：「気候変動対策と環境影響評価」

### 【報告事項】

- 自然保護専門委員会の活動報告（2020年度）
  - 「新型コロナ災禍を受けての声明文」の立案（WG）と提出見送りについて（和田）
  - 「高い植物多様性を擁する屋久島の低地照葉樹林の環境保全を求める要望書」の提出及びその後について（和田）
  - 第68回岡山大会（リモート開催）でのフォーラム開催について
- 日本生態学会自然再生エネルギータスクフォース途中経過報告（吉田）
- 地区会報告
  - 2020年12月の「有峰県立自然公園における林道整備計画の見直しを求める要望書の提出について」（和田）
  - 近畿地区会からの報告（野間）
  - 北海道地区会からの報告（露崎）
- 作業部会・アフターケア委員会報告
  - 石狩海岸風車建設事業アフターケア委員会 解散の件（露崎）
  - 辺野古・大浦湾サンゴ礁生態系保全アフターケア委員会（加藤）

- ・上関アフターケア委員会からの報告（野間）
- ・濃飛横断自動車道建設アフター委員会からの報告（和田）

## 5. その他

気象庁への生物季節観測継続を求める要望書の作成・提出について（和田）

(文責：和田直也)

## 7. 外来種検討作業部会

構成員：村上興正、池田透、岩崎敬二、上原一彦、大河内勇、角野康郎、荻部治紀、川上和人、草刈秀紀、佐藤重穂、竹門康弘、常田邦彦、戸田光彦、橋本琢磨、長谷川雅美、岸本年郎、増沢武弘、安田雅俊、森本信雄、五箇公一

## 2020年度報告

メール会議

- ①環境省・外来生物法施行状況評価検討会の開催について
  - ・外来生物法は2005年に成立（2006年施行）、2013年に改正法が成立（2014年施行）、2019年に施工後5年を経過することから、改正外来生物法付則5条に基づき施行状況の検討を行い、必要に応じて法改正の検討を行う。
  - ・2020年2月より9月にかけて3回にわたり開催、法律の課題を抽出
- ②環境省「外来生物対策のあり方検討会」の開催について
  - ・上記「外来生物法施行状況評価検討会」による法施行状況の点検・評価、課題整理の結果を基に、今後の外来生物対策のあり方に関する検討を行う
  - ・2021年1月より2021年夏にかけて計5回開催予定
- ③上記検討会を受けて外来生物法改正に向けての「要望書・意見書」の準備（検討中）
- ④環境省環境研究総合推進費2019年度・2020年度開始課題について
  - ・外来アリ対策研究（課題代表：辻和希先生）、外来哺乳類対策研究（課題代表：城ヶ原貴通）推進中
  - ・2021年度開始課題【4G-2101】「マイクロカプセル化わさび成分によるヒアリのコンテナ貨物侵入阻止とシリコン樹脂充填によるコンテナヤードでのヒアリ営巣阻止技術の確立と応用」（課題代表：橋本佳明）

(文責：五箇公一)

## 8. 将来計画専門委員会

開催日時：2021年3月16日（火）13:30-15:15

場所：オンライン

出席者（敬称略）：佐藤、三木、森長、黒川、石川、酒井、山道、立木、塩尻、湯本、彦坂、大竹、辻、土居、巖佐、石井、北島、小泉、粕谷、大串、鈴木、佐竹  
欠席者（敬称略）：田中

## 審議事項

### (1) 生態学会会員動向にもとづいた多様性促進への取り組みについて

生態学会各賞のジェンダーバランス改善のため、賞への募集要項と審査要項を工夫してはどうか。例えば、応募者のダイバーシティを十分配慮した選考を行う、などの文言を入れるだけで、応募者と受賞者が増える可能性があるのではないか。PI から受賞候補者への働きかけや積極的な推薦も必要。

### (2) 若手支援

- ・メンター制については数年前より議論がされていたが、今年度初めて「今日はモアイにいこう」フォーラムとして実施した。58名のメンティーから応募があった（メンターあたりのメンティーは平均2名）。
- ・メンティーの身分・職位は、大学院生が最も多く7割以上を占め、次に学部生が多かった。修士と博士は半々程度。応募者の所属は偏りが見られたものの、合計18機関からの応募があった。少数派であっても応募しやすい環境整備が必要。
- ・今後検討すべき点として、広報、日程調整、メンターの負担軽減、などが考えられる。アンケート調査によって意見を収集し今後の改善に活かす。
- ・またフォーラム（大会参加者のみ参加可能）以外の形態で開催できることが望ましい。

### (3) 学会の国際化について

- ・オンライン大会の良さの一つは、海外研究者を気軽に招聘し講演を依頼できること。初のオンライン開催となった岡山大会のノウハウを活かし、次回の福岡大会では国際化の推進を図る。

（文責：佐竹暁子）

## 9. 生態教育専門委員会

### 1) 審議事項

2022年4月から、委員長は中田兼介氏（京都女子大学）、副委員長は丑丸敦史氏（神戸大学）を推薦するので、認めていただきたい。

### 2) 活動報告

#### ①合宿（2020.9.5&13、オンライン）

- ・生態学会大会のフォーラムの企画、連載「生態教育の今と未来」の計画を立てた。

#### ②大会前の打ち合わせ（2021.3.14、オンライン）

- ・生態学会大会フォーラムの事前確認、連載の進捗状況、今後のフォーラムの開催について、次期委員長、副委員長の選定を行った。
- ・生態学会大会のフォーラムは、生態学会員は参加が認められるものの、生態学教育に関する支援が最も必要な、生態学を専門としない高校教員やその他教育者は参加できない。そこで、生態学会とは別の機会に、オンラインを利用した生態学教育関連のセッションを企画することを今後検討していきたい。

#### ③連載「生態教育の今と未来」

- ・2020年度は3回掲載し、2021年度の内容・執筆者も選定済み、依頼済みである。

#### ④「生態教育支援データベース」の運営

- ・アップデートの作業をアルバイトに依頼する方向で検討中

#### ⑤一般教養向けの教科書「教養の生態学（仮）」

- ・生態学教育専門委員会の中で、編集委員会を編成。現在目次の検討中。

（文責 畑田 彩）

## 10. 生態系管理専門委員会

2021年2月15日13:00～15:30

生態系管理専門委員会（zoom会議）

出席者：西廣淳、鎌田磨人、橋本佳延、西田貴明、山下慎吾、白川勝信、矢原徹一、大脇淳、赤石大輔、伊藤浩二、上野裕介、上崎聰敏、高村典子、松田裕之、岩崎雄一、小笠原奨悟、高川晋一、佐々木章晴、古田尚也、吉田丈人  
（欠席：大澤隆文、中静透、中村太士）

### 1) 調査・提言部会報告

- ・部会メンバーの合同作業として、提言論文「賢明な自然活用を目指して－グリーンインフラや多面的機能を向上させる生態学的視点(仮題)」の執筆を進めている。グリーンインフラ（GI）、生態系を活用した防災・減災（Eco-DRR）、生態系を活用した気候変動適応（EbA）など、Nature-based Solutions の概念、意義、効果的な導入のあり方などについて論じる内容である。
- ・提言論文は、生態学会大会のフォーラムで学会員に紹介して議論するとともに、夏ごろまでには学会誌に投稿する予定である。
- ・出版と同時に、地方自治体の方など広範な共有をキャパシティビルディング部会とも連携して進める。
- ・他学会との情報交換・連携の在り方についても今後検討していく。

### 2) キャパシティビルディング部会報告

- ・これまでの講習会・講演会の内容を総括した活動レポートをまとめる作業を進めており、学会誌に投稿する予定である。
- ・生態系管理の現場とオンラインで結ぶ、参加型イベントを検討している。撮影取材の旅費などの予算が必要となる見込みである。

### 3) 関連の動向についての情報共有

- 生態系管理に関連した動向について、委員会内で情報共有を行った。
- ・生態学会再エネタスクフォースについて。
- ・地域循環共生圏に関する動向。
- ・グリーンインフラネットワークジャパンについて。
- ・生物多様性国家戦略、JBO3 について。

（文責：西廣淳）

## 11. 大規模長期生態学専門委員会

日時：2021年2月12日～3月9日

方法：委員間のメール交換とZoomによるミーティング（3月4日）

出席者：石原正恵（京都大学）、伊東明（大阪市大）、内海俊介（北海道大学）、大手信人（京都大学）、黒川紘子（森林総研）、木庭啓介（京都大学）、中野伸一

(京都大学)、中村誠宏(北海道大学)、松崎慎一郎(国立環境研)、村岡裕由(岐阜大学)

#### 【総会に報告すべき事項】

1. 各種研究ネットワーク、プロジェクトの活動について  
JaLTER、DIWPA、ANEMNOE、Global Urban Evolution Project、APBON、GEO、全国演習林協議会「森羅プロジェクト」、GLP、Forest Global Earth Observatory など、国内外の研究ネットワークが研究活動を進めている。
2. JaLTER の活動とデータベースの運営について  
コロナ禍の影響で、運営に関する諸会議はすべてオンラインで開催され、例年オンサイトで行われている Open Science Meeting は、2021 年 10 月(於: 北海道大学和歌山研究林)に延期された。対外的には JaLTER メンバーが ILTER の中心的役割を担っている。JaLTER Database(DB)は継続して運営されている。が、システムの更新が課題となっている。
3. 生態学会における情報インフラの整備にむけて  
JaLTER DB は、サイトネットワーク・メンバーのデータを格納・公開するだけでなく、生態学会の Ecological Research Data Paper のデータ受け入れて、日本の生態学における Open data に一定の役割を果たしている。しかし、現状、DB はメンバーのボランティアな活動によって維持管理がなされており、今後、上のような問題が生じたときなどに的確に対処できる安定的な体制が作られることが望まれる。このような状況に鑑み、大規模長期生態学専門委員会では、JaLTER DB の維持についてと、さらに今後の我が国の生態学におけるデータベース等の情報インフラストラクチャの整備の必要性に関して議論を行った。これを経て、生態学会と会員に上記のような問題を共有し、解決策を共に議論できるように働きかける必要があることを確認した。

#### 【総会での報告を要しない事項】

メンバーからのネットワーク、プロジェクトについての報告

1. DIWPA (DIVERSITAS in the Western Pacific and Asia)(京大・中野)  
例年開催している国際生物学研修コース(アジアと西太平洋地域の、主に発展途上国の大学院生・若手研究者を対象とした、生態系観測の研修コース)は、コロナ禍のために開催できなかったが、京大生態研は韓国・国立生態院(NIE)と、オンラインで関連の国際ワークショップを開催した。  
<https://diwpa.ecology.kyoto-u.ac.jp/>
2. ANEMONE(環境DNAを利用した生物多様性観測ネットワーク)(北大・内海)  
活動を本格的に開始した。  
<https://sites.google.com/view/all-nippon-edna-monitoring-net/>
3. Global Urban Evolution Project(北大・内海)  
都市における適応進化を中心課題に、進化生態学分野における大規模な共同研究  
<http://www.globalurbanevolution.com/>

4. APBON (Asia Pacific Biodiversity Observation Network)(岐阜大・村岡)  
第12回 APBON ワークショップをオンライン開催。  
APBON ウェブセミナーの立ち上げ。  
<http://www.esabii.biodic.go.jp/ap-bon/meetings/index.html>
5. GEO (Group of Earth Observations)(岐阜大・村岡)  
日本の GEO 活動は Asia Oceania Group on Earth Observations (AOGEO, <https://aogeo.net/jp/>) に貢献している。APBON は AOGEO のタスクグループであると同時に、GEO BON の地域パートナーとして活動している。  
<https://japangeo.jp/jp/staticpages/index.php/about>
6. 全国演習林協議会プロジェクト(京大・石原)  
全国大学演習林協議会プロジェクト「森羅プロジェクト」として、17大学の演習林の森林プロットデータ(約910プロット、人工林含む)の公開(2021年度予定)と横断解析を進めている。
7. Global Land Project(京大・石原)  
3rd GLP Asia conference を2021年度秋に札幌で開催予定。準備を進めている(オンラインになる可能性も)。テーマは” Hazards, Disasters and Land Science: Towards Asian and Global SDGs for Land Systems”。  
<https://www.glpasiaconference.com/>
8. 国環研のプロジェクト、気候変動適応PGテーマ1-1(北大・中村)  
「陸域生態系の長期変化観測と気候変動の影響評価および適応に関する研究」において、全国の約250の長期観察林プロットのデータを集め、気候変動に対する森林の応答についての解析が進められている。  
<https://ccca.nies.go.jp/ja/program/pj1-1.html>
9. スミソニアン大面積調査区ネットワーク (ForestGEO, Forest Global Earth Observatory)(大阪市大・伊東)  
2020年は、COVID-19のため、フィールドワーク、ワークショップ等の活動は困難だったが、webセミナーが開催されHPは充実してきた。気象データ、解析方法、データベースなどのwebページがある。  
<https://forestgeo.si.edu/>
10. Belmont Forum Programme, Transformation to Sustainability(京大・大手)  
” Transformation As Praxis: Exploring Socially Just and TRansdisciplinary Pathways to Sustainability in Marginal Environments (TAPESTRY)”が、日本、英国、ノルウェー、インドの研究者の共同で行われている。社会生態学的プロジェクト。インド・バンガラディシユのマンダローブ生態系が重要な調査対象。  
<https://t2sresearch.org/project/tapestry/>

#### 【新年度の活動計画】

- ・ JaLTER/ILTER  
Open Science Meeting(北海道大学和歌山研究林)2021年10月中旬
- ・ GLP  
3rd GLP Asia conference を2021年度秋に札幌で開催予定。
- ・ その他、各ネットワーク、プロジェクトの活動について



での情報交換を随時行っていく。

- ・日本の生態学における情報インフラの整備に向けた議論を広げていく。

(文責：大手信人)

## 12. 野外安全管理委員会

日時：2021年3月5日～9日 メールにて実施

参加者：飯島、大館、奥田、鈴木、粕谷、北村、石原

### 2020年度活動報告

- ・Zoomにて委員会を開催した(8月31日)。  
議題は、九州大学で起こった野外調査中の不審者出現と遺体発見についての報告と不審者対策について。不審者に対する対応マニュアルの作成を行うことになった。
- ・68回大会でのフォーラム開催の準備を進めた。

### 2021年度活動予定

- ・69回大会でのランチョンセミナー(フォーラム)とポスター展示の準備を行う。
- ・フォーラム内の動画配信の検討を引き続き行う  
フォーラムで扱っている内容を動画化し、インターネット公開に向けて検討と準備を進める
- ・不審者に対する対応マニュアルの作成を行う。
- ・事故情報の収集と集約  
引き続き、野外調査、実習中の事故やヒヤリハット事例の例を収集し、解析を続ける。該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。
- ・和文誌の『フィールド調査における安全管理マニュアル』の配布  
在庫がありますので、必要部数を配布できます。必要な場合は、連絡をお願いします。

(文責：石原道博)

## 13. キャリア支援専門委員会

オンライン：3月9日

### 【2020年度活動報告】

#### 1) 岡山大会での企画

- ・合同フォーラム(U10 3月21日 13:00-14:30 Room G)
- ・「人生の選択の裏側を聞いてみよう2：バブル経済から新型コロナまで、私たちの生存戦略」
- ・キャリア支援相談室(3月18日, 19日, 20日 13:00-18:00, オンライン開催)
- ・(一社) Sus-Proの相談員による無料の就職・転職相談窓口
- ・キャリア支援ミニセミナー(環境アセスメント士会、建設コンサルタンツ協会)
- ・建設コンサルタンツ協会、環境省及びNORNAC(自然系調査研究機関連絡会議)加盟団体による事業紹介ブース
- ・企業等の就職関連情報(大会HPへのリンク掲載)
- ・託児補助運営サポート  
今回も実行委員会に委員が入ったことで、スムーズに

事が運べた。

#### 2) その他

- ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加(年4回)  
男女共同参画学協会シンポジウム、ワークショップへの参加
- ・女子中高生夏の学校オンライン座談会への参加
- ・若手女性研究者のリーダーシップ育成とネットワーク構築のためのワークショップへの参加(ニュースレターにて参加報告を掲載)
- ・各種統計情報の和文誌化  
生態学会和文誌に以下の学術情報特集への投稿を企画(2020年度中の投稿を予定していたが、次年度に持ち越し)  
①会員データ、②男女共同参画学協会連絡会による大規模アンケート、③大会参加者の属性データ

### 【来年度の活動計画】

- 1) 福岡大会での活動(以下は対面開催の場合。企画によりオンライン化も検討)
  - ・キャリア支援フォーラム
  - ・キャリア相談ブース
  - ・企業パンフレットの配架
  - ・男女共同参画ランチョンフォーラム
  - ・こども生態学講座
  - ・託児室・ファミリー休憩室
- 2) その他の活動
  - ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加(年4回程度)
  - ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加(年1回)
  - ・男女共同参画学協会の幹事学会(2022年11月～)の引き受けに向け、WGを設置
  - ・理工チャレンジ(リコチャレ)
  - ・女子中高生夏の学校
  - ・各種統計情報の生態学会和文誌への投稿

(文責：上野裕介)

## 14. 監査報告

一般社団法人 日本生態学会  
監事 陀安一郎・齊藤隆

当法人の2020年度の事業計画、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

### 1. 監査の方法及びその内容

2020年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的には、すべての理事会に出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。また、2021年2月6日に学会事務局において会計書類を閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。

### 2. 監査の結果

- (1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
- (2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款に違反する重大な事実はない。

- (3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

## 15. Jeconet の移管計画について

### 1 Jeconet 管理運営の経緯

- ・生態学全般にかかわるメーリングリスト (ML) Jeconet は 1995 年 5 月に立ち上げられた
- ・農林水産省の研究サーバ (農林水産研究情報総合センター) で有志により運用
- ・広い参加者層によって生態学に関連する幅広い情報交換や議論の場として定着
- ・生態学に関心のある人は誰でも参加可能 (2021/1/27 現在、登録アドレス数 4619)
- ・投稿内容は個人の誹謗中傷や公序良俗を乱すものでなければ、幅広く容認。
- ・運用システム (農林水産研究情報総合センターにおける ML) が 2022 年に廃止で存続困難
- ・ユーザー層等を勘案し、日本生態学会に Jeconet 管理の可能性を打診 (2020 年 7 月)

### 2 日本生態学会における Jeconet 管理運営の議論

- ・日本生態学会では Google Workspace に移行を完了、ML 管理の基盤は用意できる
- ・2020 年 12 月の ESJ 理事会にて、日本の生態学発展のために情報交流の場として Jeconet の重要性は高いと評価され、日本生態学会が Jeconet の管理運営を担うことを了承

### 3 Jeconet 移行計画

#### ①日本生態学会の活動としての位置づけ、管理運営体制

- ・生態学の発展のために、広く生態学に関する情報交換や議論の場を用意すること
- ・生態学会会員以外の利用者にも広く利活用される場とすること
- ・ML にて投稿・議論される内容は日本生態学会の見解を表すものではない

#### ②管理運営体制と方針

- ・日本生態学会内に学会活動および生態学に関する研究情報の交流を支援する広い目的をもつ新委員会『情報交流支援委員会』を発足させ、Jeconet の管理実務を担う
- ・これまでの Jeconet 運営方針を基本に、法人として日本生態学会が責任を負うことを想定したガイドラインを策定する
- ・Jeconet 登録情報は最小限とし、個人情報管理の取り扱いルール検討を明示する

#### ③システム構築・運用開始の段取り

- ・技術面のサポートは日本生態学会のサーバ管理業者に委託
- ・日本生態学会による管理運営体制およびシステムが整備され次第、運用を開始する。
- ・現 Jeconet 登録情報の一括移行はせず、利用希望者が自身で新 Jeconet に登録する

### 4 『情報交流支援委員会』の発足と活動内容 (案)

- (1) 生態学に関する情報交流を広く支援すること

- (2) 生態学に関するデータや知見の普及の推進を支援すること

- (3) その他 (今後検討)

## 5 Jeconet の管理運営の移行スケジュール (案)

2021 年 2 月 13 日 理事会：移行計画案、新委員会設置方針の検討 (完了)

2021 年 3 月 21 日 理事会：新委員会の活動内容と構成を議論

2021 年 4 - 5 月 新 Jeconet 管理運営ルール検討、新システム立ち上げ作業

2021 年 7 月 理事会：新 Jeconet の管理方針・ガイドライン・システム確認

2022 年 3 月まで 新 Jeconet 登録・運用開始、現 Jeconet 運用終了、現行サーバ廃止

(文責：村岡裕由)

## 16. 今後の出版体制について

### 報告内容

日本生態学会、種生物学会、個体群生態学会は、「日本における生態学系主要 3 英文誌 (ER 誌、PE 誌、PSB 誌) を、学会誌として効果的に編集・出版する体制を構築し、日本からの生態学関係科学の国際情報発信と国際的なプレゼンスを向上させ、サステナブルな学会出版環境を構築する」ために、2018 年より共同出版事業を開始しました。当初は、3 英文誌の出版契約について日本生態学会に一元化することを予定していましたが、個体群生態学会の事情で Wiley 社との次回の契約更新 (2023 年) までに出版体制を明確化するという約束で事業を進めました。

今年 (2021 年) の 1 月 12 日に、個体群生態学会の方から Population Ecology 誌の日本生態学会からの出版について学会内の了解が得られたとの連絡があり、1 月 30 日に 3 学会の会長、英文誌編集長が出席し、生態学関係 3 英文誌協議会を開催して、今後の方針について協議しました。2023 年の契約更新、科研費申請に向けた出版体制作りが必要です。現状では、生態学会には PE 誌と PSB 誌の出版について全く規約がないため、生態学会が 3 誌を出版する体制を明確化して行く必要があります。

### 審議提案 (2021 年 2 月 13 日理事会にて承認済)

- ・生態学会の事業として ER 誌、PE 誌、PSB 誌を出版することを明確化する。
- ・生態学会は出版元という立場で、合同編集部を通じて PE 誌、PSB 誌を運営し、その関係は学会間の覚書で定義する。
- ・生態学会は ER 誌、個体群生態学会は PE 誌、種生物学会は PSB 誌の編集を担当し、編集審査は各誌が独立して行う。
- ・2023 年に向けて、生態学会総会や 3 学会の覚書の改正に向けた作業を進める。
- ・生態学会としては 3 誌出版を含んだ活動方針と委員会規程の改定に向けて準備を進める。

## 17. 個人情報等の取り扱い方針(プライベートポリシー)改訂について

個人情報等の取り扱い方針(プライベートポリシー)改訂が以下のように変更されたことが報告された。

### 3. 個人情報の管理

学会は、会員の個人情報は細心の注意をもって取り扱い、厳重に管理します。とくに個人情報の保持期間、自動削除の規定、および会員から削除請求のあったときの対応の規定を別途定めます。

### 5. 個人情報保護方針の変更

学会は、個人情報の取り扱いについて継続的に改善に努め、その方針と規定の変更は、理事会の承認を得ておこないます。本方針が会員への予告なく変更されることがありますが、変更についてはニュースレター、学会ホームページ等に掲載します。

(全文：<https://esj.ne.jp/esj/privacy.html>)

## B. 審議事項

### 第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場異議なくこれを可決承認した。

- ・任期満了により退任する役員(任期:2019.3 総会後～2021.3 総会まで)

理事:永松大、三木健、黒川絃子

監事:陀安一郎

- ・理事会推薦役員候補者(任期:2021.3 総会後～2023.3 総会まで)

理事:大塚俊之、佐々木雄大、本庄三恵

監事:永松大

(参考)上記以外の任期中の役員(任期:2020.3 総会後・2022.3 総会まで)

理事:湯本貴和、宮下直、中川弥智子、久米篤、木村恵、内海俊介、東樹宏和、中野伸一、吉田丈人、西廣淳、近藤倫生、辻和希、鏡味麻衣子、北島薫、宮竹貴久、村岡裕由、和田直也  
監事:齊藤隆

### 第2号議案 定款の変更に関する件

定款の変更案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場異議なくこれを承認可決した。

#### 【変更案】

#### 第1章 総則(公告)

第4条 当法人の公告は、電子公告により行う。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、官報に掲載する方法により行う。

#### 第2章 会員(種別)

第6条2 この法人には、40名以内の代議員を置くものとする。なお、代議員は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律(以下「法人法」)上の社員とする。

第6条8 補欠の代議員を選挙する場合は、次に掲げる事項も合わせて決定しなければならない。

- (1) 当該候補者が補欠の代議員である旨
- (2) 当該候補者を1人又は2人以上の特定の代議員の補

欠の代議員として選任するときは、その旨及び当該特定の代議員の氏名

(3) 同一の代議員(2以上の代議員の補欠として選任した場合にあっては、当該2以上の代議員)につき2人以上の補欠の代議員を選任するときは、当該補欠の代議員相互間の優先順位

#### 第3章 代議員総会(種類)

第13条 この法人の社員総会である代議員総会(この定款及び関連の規則等において「総会」と略す。)は、定時総会及び臨時総会の2種とする。

(定款全文 <https://esj.ne.jp/esj/Rule/Teikan.html>)

### 第3号議案 2020年決算承認に関する件

当期（自2020年1月1日至同年12月31日）における決算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
費目	20 予算	20 決算	費目	20 予算	20 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	27,000,000	27,055,200	ER・PE・PSB	900,000	2,092,413
正会員（学生）	5,000,000	5,403,500	生態誌	3,000,000	2,992,340
賛助会員	1,400,000	1,396,000	保全誌	2,000,000	2,342,750
小計	33,400,000	33,854,700	会誌発送費用	1,000,000	958,850
			ニュースレター	350,000	315,700
科研費			英文校閲・翻訳	500,000	582,247
国際情報発信強化 A	12,600,000	12,600,000	英文誌 Open Access 経費	3,600,000	4,944,096
公開講演会	1,300,000	0	和文誌編集費	500,000	532,899
小計	13,900,000	12,600,000	小計	11,850,000	14,761,295
			会議費	350,000	50,646
学会誌売上げ	1,000,000	795,200	旅費・交通費	2,800,000	468,254
出版印税	700,000	1,073,224	人件費	18,000,000	17,061,747
論文掲載料	120,000	1,810,000	地区会活動費	2,220,000	927,989
広告代	180,000	180,000	大会支出	24,000,000	12,248,248
著作権使用料	250,000	190,534	個体群生態学会出版企画費	350,000	332,124
大会収入	24,000,000	15,096,601	INTECOL 会費	1,800,000	0
講習会費	200,000	0	事務費		
寄附金	0	1,319,824	通信費	500,000	334,080
その他	2,000	16,695	消耗品費	350,000	364,966
前年度繰越金	77,909,080	77,909,080	雑費	350,000	285,937
			決済代行手数料	900,000	581,628
			サーバ関連費	800,000	693,927
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小計	4,580,000	3,940,538
			各種委員会費	1,100,000	239,656
			広報費	250,000	108,666
			EAFES 費用	200,000	0
			講習会費	200,000	0
			会員管理委託費	4,700,000	4,487,303
			法人税	400,000	267,400
			次年度繰越金	78,861,080	89,951,992
合計	151,661,080	144,845,858	合計	151,661,080	144,845,858

単年度収入 73,752,000 66,936,778

単年度支出 72,800,000 54,893,866  
 単年度収入 - 支出 952,000 12,042,912

<特別会計>

賞準備金

収入の部			支出の部		
	20 予算	20 決算		20 予算	20 決算
前年度繰越金	11,927,808	11,927,808	賞金		
預金利息	0	100	宮地賞	400,000	400,000
			大島賞	200,000	200,000
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	800,000	800,000
			雑費	4,400	3,850
			次年度繰越金	11,123,408	11,124,058
合計	11,927,808	11,927,908	合計	11,927,808	11,927,908

貸借対照表

2020年12月31日現在

一般社団法人 日本生態学会

(単位：円)

科 目	金 額	科 目	金 額
( 資 産 の 部 )	円	( 負 債 の 部 )	円
流 動 資 産		流 動 負 債	
現金及び預金	124,101,365	未払金	3,847,141
前渡金	97,470	未払法人税等	267,400
前払費用	168,709	前受金	26,265,100
未収収益	9,500	預り金	365,111
固 定 資 産		固 定 負 債	
特定資産 学会賞準備金資産	11,124,058	退職給付引当金	3,680,300
		負債合計	34,425,052
		( 正 味 財 産 の 部 )	
		一般正味財産	89,951,992
		指定正味財産(うち 特定資産への充当額)	11,124,058
		正味財産合計	101,076,050
資産合計	135,501,102	負債・純資産合計	135,501,102

第4号議案 2021年度予算承認に関する件

次期（自2021年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収 入			支 出		
費 目	20 決算	21 予算	費 目	20 決算	21 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	27,055,200	25,500,000	ER・PE・PSB	2,092,413	1,500,000
正会員（学生）	5,403,500	5,000,000	生態誌	2,992,340	2,200,000
賛助会員	1,396,000	1,300,000	保全誌	2,342,750	2,300,000
小計	33,854,700	31,800,000	会誌発送費用	958,850	500,000
			ニュースレター	315,700	350,000
科研費			英文校閲・翻訳	582,247	500,000
国際情報発信強化A	12,600,000	12,600,000	英文誌 Open Access 経費	4,944,096	4,000,000
公開講演会	0	1,450,000	和文誌編集費	532,899	500,000
小計	12,600,000	14,050,000	小計	14,761,295	11,850,000
			会議費	50,646	150,000
学会誌売上げ	795,200	600,000	旅費・交通費	468,254	1,000,000
出版印税	1,073,224	700,000	人件費	17,061,747	17,500,000
論文掲載料	1,810,000	1,800,000	地区会活動費	927,989	2,000,000
広告代	180,000	0	大会支出	12,248,248	11,700,000
著作権使用料	190,534	200,000	公開講演会	0	300,000
大会収入	15,096,601	9,000,000	個体群生態学会出版企画費	332,124	350,000
講習会費	0	200,000	INTECOL 会費	0	2,250,000
寄附金	1,319,824	0			
その他	16,695	2,000	事務費		
前年度繰越金	77,909,080	89,951,992	通信費	334,080	400,000
			消耗品費	364,966	350,000
			雑費	285,937	350,000
			決済代行手数料	581,628	900,000
			サーバ関連費	693,927	500,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小計	3,940,538	4,180,000
			各種委員会費	239,656	1,500,000
			広報費	108,666	100,000
			選挙費	0	250,000
			EAFES 費用	0	0
			講習会費	0	200,000
			会員管理委託費	4,487,303	4,700,000
			法人税	267,400	300,000
			次年度繰越金	89,951,992	89,973,992
合計	144,845,858	148,303,992	合計	144,845,858	148,303,992

単年度収入 66,936,778 58,352,000

単年度支出 54,893,866 58,330,000  
 単年度収入 - 支出 12,042,912 22,000

<特別会計>  
賞準備金

収入の部			支出の部		
	20 決算	21 予算		20 決算	21 予算
前年度繰越金	11,927,808	11,124,058	賞金		
預金利息	100	0	宮地賞	400,000	400,000
			大島賞	200,000	100,000
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	800,000	700,000
			雑費	3,850	3,850
			次年度繰越金	11,124,058	10,420,208
合計	11,927,908	11,124,058	合計	11,927,908	11,124,058

**第5号議案 役員・代議員選任規則変更に関する件**

役員・代議員選任規則変更案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場異議なくこれを承認可決した。

**【変更案】**

**第一章 選挙管理委員会（投票の無効）**

第4条 次の各号の投票は、これを無効とする。

- (1) 所定の期日までに完了しなかった投票。
- (2) 所定の投票手段によらない投票。
- (3) 候補者でない者の氏名を記載したもの。
- (4) 記入の確認が困難なもの。
- (5) その他、選管委が無効と認めたもの。

**第三章 代議員（投票の方法）**

第18条 投票は電子投票で選管委の定めた選挙期日までに行う。

2 投票は無記名投票とする。

第19条（第4条と重複のため削除）

※ 以後の条番号を変更する

**第四章 補則（変更）**

第23条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

（役員・代議員選任規則全文 <https://esj.ne.jp/esj/Rule/Election.html>）

**第6号議案 入会及び会費規則改訂に関する件**

入会及び会費規則改訂案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場異議なくこれを承認可決した。

**【改訂案】**

第5条 本法人の会費については、本法人の定款に定められたことのほかは、この規則による。

第8条 本法人の会員の会費は、次に掲げる基本会費、冊子体購読費の合計額とする。

	基本会費	冊子体購読費* (送料込)	大会発表	選挙・被選挙権 (代議員)
正会員（一般）	9500 円	①：8000 円 ②：2000 円 ③：2000 円	○	○
正会員（学生）	4500 円	①：8000 円 ②：2000 円 ③：2000 円	○	○
賛助会員 (個人・団体)	年会費（購読誌） 20000 円（①・②の冊子体） 22000 円（①・②・③の冊子体）		×	×
名誉会員	0 円	0 円	○	×

**\* 冊子体購読費**

本法人の会員には、希望があれば、次の学会誌の冊子体を有料（冊子購読費）で配送する。

- ① ER：Ecological Research（年6回発行）
- ② 生態誌：日本生態学会誌（年2回発行）
- ③ 保全誌：保全生態学研究（年2回発行）

第11条 本法人の非会員に向けた学会誌（冊子体）の定期購読料は、以下に掲げる年額とする。なお、Ecological Researchの定期購読は、出版社との契約事項により、本法人では受付けない。

- ① 日本生態学会誌 5000 円
- ② 保全生態学研究 5000 円

附則 ⑤この規則は、2022年1月1日から施行する。

（入会及び会費 規則全文 [https://esj.ne.jp/esj/Rule/Nyukai\\_Kaihi.html](https://esj.ne.jp/esj/Rule/Nyukai_Kaihi.html)）

**第7号議案 第71回大会（2024年）担当地区会に関する件**

第71回大会（2024年）担当地区会候補関東地区の提案があり満場意義なく承認可決した。

## II. 第68回日本生態学会大会の記録

第68回日本生態学会大会はオンラインにて2021年3月17日～3月21日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム17、自由集会20、フォーラム11、一般講演(口頭発表)224、一般講演(ポスター発表)708、高校生ポスター35、ジュニア生態学講座、が行われました。参加者は2797名でした。5日間の日程とポスター賞・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

### 日程

- 3月17日 代議員会、シンポジウム、自由集会、一般講演(口頭発表・ポスター発表)、高校生ポスター
- 3月18日 シンポジウム、自由集会、一般講演(口頭発表・ポスター発表)、フォーラム、高校生ポスター
- 3月19日 シンポジウム、自由集会、一般講演(口頭発表・ポスター発表)、高校生ポスター、懇親会
- 3月20日 総会、各賞授賞式、受賞講演、自由集会、一般講演(ポスター発表)、フォーラム、高校生ポスター、ジュニア生態学講座
- 3月21日 公開講演会、シンポジウム、自由集会、一般講演(ポスター発表)、フォーラム、高校生ポスター

### ポスター賞受賞者

#### <動物個体群 / Animal population >

##### 【最優秀賞】

「寄生虫感染個体の低いボディコンディション：原因か結果か、両方か」\*長谷川稜太、大槻泰彦、植村洋亮、古澤千春、中正大、小泉逸郎(北大 環境)

##### 【優秀賞】

「ハプロタイプごとに異なるアルゼンチンアリの採餌行動」\*瀬古祐吾(近大院・農)、一山智也((株)オリコン)、早坂大亮、澤島拓夫(近大院・農)

#### <動物群集 / Animal community >

##### 【最優秀賞】

「節足動物群集のDNAメタバーコーディングから被食-捕食ネットワークの季節動態へ」\*鈴木紗也華(京大生態研)、馬場友希(農研機構・農環研)、東樹宏和(京大生態研)

##### 【優秀賞】

「腐肉に集まる昆虫の種相及び個体数は微生物やウジを排除した場合どう変わるのか?」\*松島義治、橋詰茜(日大・生物資源)、幸田良介(大阪・環農水研)、中島啓裕(日大・生物資源)

「安定同位体微量測定を用いた淡水寄生虫類の体サイズと栄養段階の関係」\*木下桂(京大大学生態研)、浦部美佐子(滋賀県立大学)、大西雄二、福島慶太郎、木庭啓介(京大大学生態研)

#### <動物と植物の相互関係 / Animal-plant interaction >

##### 【最優秀賞】

「光合成ウミウシと寄生性カイアシ類の相互作用：盗んだ葉緑体は寄生者を利するか?」\*三藤清香(奈良女子大学)、宮島利宏(東大大気海洋研)、遊佐陽一(奈

良女子大学)

##### 【優秀賞】

「Accelerating coarse-macro-aggregate formation: Investigation of plant-earthworm-microbe interactions in oligotrophic soil.」\*Gen TAKAHASHI, Chiaki TATSUMI, Yoshitaka UCHIDA (Hokkaido univ.)

「直立するオスと下垂するメス-雌雄異株植物オニドコロにおける花形質と訪花数の雌雄差」\*工藤葵(京都大学)、杉原優(京都大学)、岩手生工研、太田敦士(京都大学)、寺内良平(京都大学、岩手生工研)

#### <動物繁殖・生活史 / Animal reproduction and Life history of animals >

##### 【優秀賞】

「イトヨ集団間におけるアンドロゲン依存的な繁殖縄張り行動発現の遺伝的変異」\*山崎遥(福井県立大学)、森誠一(岐阜協立大学)、石川麻乃、北野潤(国立遺伝学研究所)、小北智之(福井県立大学)

「速度をかえるか、期間をかえるか? ~降海前サクラマスのサイズ依存的な成長戦略~」\*二村凌(北大環境)、森田健太郎(北大FSC)、菅野陽一郎(コロラド州立大)、汲川正次、奥田篤志、松岡雄一、杉山弘、高橋廣行、高井孝太郎、内田次郎、岸田治(北大FSC)

#### <行動 / Behavior >

##### 【最優秀賞】

「体サイズに関する同類交配は積極的な配偶者選びの結果か：長期研究データによる検証」\*澤田明(北海道大学)、岩崎哲也(大阪市立大学)、高木昌興(北海道大学)

##### 【優秀賞】

「ヘビの社会研究の夜明け：ウミガメを採餌するアカマタの社会行動からの考察」\*松本和将、森哲(京都大学)

「ショウジョウバエの一遺伝子行動多型における表現型相関とその遺伝基盤」\*桂優菜(千葉大・院・理)、田中良弥(名大・院・理)、佐藤光彦(東北大・院・農)、高橋佑磨(千葉大・院・理)

「山村におけるトビの採餌場所と屍肉利用様式」\*宮島尚也、梶村恒(名古屋大・生命農)

#### <植物個体群 / Plant population >

##### 【最優秀賞】

「後氷期の気候温暖化が引き起こした分布末端集団の孤立化-ゼンテイカ群での事例-」\*増田和俊、瀬戸口浩彰、長澤耕樹(京都大学)、沢和浩(天童市)、丹後亜興(隠岐郡海士町)、坪井勇人(白馬五竜高山植物園)、福本繁(ABCプロジェクト)、堀江健二(旭川市北邦野草園)、石原正恵、阪口翔太(京都大学)

##### 【優秀賞】

「景観アプローチから明らかにする都市における植物の適応進化」\*石黒智基(北海道大院環境科学院)、Marc T. J. JOHNSON (Univ. of Toronto)、内海俊介(北海道大学FSC)

#### <植物繁殖・生活史 / Plant reproduction and Life history of plants >



【最優秀賞】

「バイケイソウ個体群における開花同調性と花茎食害の関連性」\* 伊藤陽平、工藤岳 (北海道大学)

【優秀賞】

「ツククサの花形質の集団間変異は送粉環境への適応か? : 野外調査と栽培実験による検証」\* 増田佳奈、邑上夏菜 (神戸大)、勝原光希、宮崎祐子 (岡山大)、丑丸敦史 (神戸大)

<植物生理生態 / Plant ecophysiology >

【最優秀賞】

「樹木の日長受容器官は光の均一性によって異なるのか? - 落葉樹7種を用いた検証 -」\* 大野美涼、山尾僚 (弘前大学)

【優秀賞】

「シカ採食による葉の経済的損失から植生変化のメカニズムをさぐる」\* 若月優姫、西澤啓太、森章 (横浜国立大学)

「針葉樹の高い光利用効率は、森林の生産性を向上させるのか- 屋久島4サイト間の比較 -」\* 亀井啓明 (京都大学)、相場慎一郎 (北海道大学)、小野田雄介 (京都大学)

「林床植物21種における根形質とアーバスキュラー菌根菌感染率の種間変異」\* 佐久間夕芽、佐藤莉咲、富松裕 (山形大学)

<群落・景観・遷移・更新 / Plant community, Landscape ecology, Succession and regeneration >

【最優秀賞】

「クツムシの河川に沿った分布拡大: Stream-hierarchy モデル vs. Headwater モデル」\* 松井風河、今井達也 (東京大学)、今藤夏子 (国立環境研究所)、宮下直 (東京大学)

【優秀賞】

「Changes of soil-microbial activities in a forest-degradation trajectory of logged-over tropical rain forests in Borneo」\* Linzi JIANG, Kanehiro KITAYAMA (Kyoto Univ. Forest Ecology)

「屋久島照葉樹林における樹冠の光獲得量と成長速度の関係」\* 辻井美帆 (京都大学)、相場慎一郎 (北海道大学)、飯田佳子 (森林総研)、梅木清 (千葉大学)、北島薫、小野田雄介 (京都大学)

「流程分布する近縁3種のカゲロウ類における個体群構造と遺伝構造」\* 岡本聖矢、東城幸治 (信州大学)

<物質循環 / Material cycling >

【最優秀賞】

「日本の森林生態系における土壌純無機化速度と火山灰加入の関係」\* 佐々木真優 (京大・農・森林生態)、向井真那 (国際農研)、北山兼弘 (京大・農・森林生態)

【優秀賞】

「花崗岩土壌上に成立したコナラ林のリン利用特性と土壌フォスファターゼ活性」\* 水上知佳、澤田佳美、北山兼弘 (京大・農・森林生態)

<生物多様性 / Biodiversity >

【最優秀賞】

「自然草原における複数栄養段階を考慮した生物多様

性効果の検証」\* 西村一晟、橘太希 (横浜国大環境情報)、内田圭 (東京大学)、XIAOMING LU, XUEZHEN ZHAO, YONGFEI BAI (Chinese Academy of Science)、佐々木雄大 (横浜国大環境情報)

【優秀賞】

「ハナカミキリ-酵母共生系の多様性: 幼虫食性と酵母の種特異性」\* 岸上真子 (名古屋大)、笹倉靖徳 (筑波大・下田臨海)、山迫淳介 (農研機構・農環研)、湯澤宣久 (日本甲虫学会)、土岐和多瑠 (名古屋大)

「ミャンマーの古代湖・インレー湖における魚類相形成: 系統・集団遺伝学的アプローチ」\* 福家悠介 (京都大学)、鹿野雄一 (九州大学)、MUSIKASINTHORN Prachya (カセサート大学)、渡辺勝敏 (京都大学)

<進化 / Evolution >

【最優秀賞】

「宿主の体色を盗む? : 寄生性多毛類における宿主の体色と一致した隠蔽色の獲得」\* 杉山高大、加山基、宮下英明 (京都大学)、筒井(石川)牧子 (ヤマザキ動物看護大学)、朝倉彰、後藤龍太郎 (京都大学)

【優秀賞】

「トンボ科における繁殖戦略の多様化は雌雄の交尾器形態の共進化をもたらしたか?」\* 渡邊涼太郎、池田紘士 (弘前大学)

「アノールトカゲの温度適応に関わるゲノム内加速領域の検出」\* 坂本美久、金森駿介 (東北大学)、Luis M. D. AZ (Mus. Nat. Hist. of Cuba)、Antonio C. aDIZ (Habana Univ.)、石井悠 (東北大学)、山口勝司、重信秀治 (基礎生物学研究所)、河田雅圭 (東北大学)

「クロサンショウウオにおける頭胴長の緯度パターンは雄間闘争によって生じたのか?」\* 森井椋太、西野敦雄、池田紘士 (弘前大・農生・生物)

<外来種 / Introduced species >

【最優秀賞】

「奄美大島の森林に棲むイエネコの食性2型: 絶滅危惧種依存型と人為資源依存型」\* 伊澤あさひ (東京大学)、中下留美子 (森林総合研究所)、塩野崎和美 (奄美自然研)、亘悠哉 (森林総合研究所)、宮下直 (東京大学)

【優秀賞】

「葉、根及び土壌中の微生物叢と外来植物の侵略性との関係」\* 中村直人 (京都大学農学部)、東樹宏和 (京大大学生態研)、Luke S. FLORY (Florida Univ.)、北島薫 (京都大学農学部)

<保全 / Conservation >

【優秀賞】

「絶滅危惧植物ホテイアツモリソウ保全のための集団ゲノミクス解析」\* 本宮万愛、廣田峻、佐藤光彦、松尾歩、陶山佳久 (東北大学)

「シンボル種への指定は人々の生物多様性に対する関心を高めるか? 複数国での広域分析」\* 杉浦由佳、深野祐也、吉田薫、曾我昌史 (東京大学)

「空間スケールと管理条件による人々の生物多様性に対する認識の変化: 都市緑地での検証」\* 富高まほろ、岩知道優樹、佐々木雄大 (横浜国立大学大学院)

「シジュウカラの音声信号の伝達に騒音が及ぼす影響警戒声の種類と情報量に着目して」\* 守谷元瑛、先崎理之、北沢宗大、河村和洋、中村太士（北海道大学）

#### <生態系管理・生態学教育・普及 / Ecosystem >

##### 【最優秀賞】

「凍結防止剤の散布によって昆虫の形態や採餌行動は変化するのか」\* 寺嶋公紀、山尾僚、東信行、野田香織、池田紘士（弘前大）

##### 【優秀賞】

「カメラトラップにおけるニホンジカとイノシシの滞在時間に影響を与える環境要因」\* 宮本航雅、鈴木牧（東京大学）、中島啓裕、矢島豪太（日本大学）

#### 高校生ポスター賞受賞者

##### 【最優秀賞】

「シジミの川下り ～タイワンシジミ成貝移動動態の解明～」\* 中村彰吾、朝比奈奎人、伊藤綾祐、熊谷孟樹、山本大嗣（浜松学芸高等学校）

「なぜトウカイコモウセンゴケの葉の色は変わるのか」\* 樽林晴翔、白川巧弥、土屋柊人、磯部神威（浜松学芸高等学校）

##### 【優秀賞】

「なぞウズムシの正体を追え～プラナリア類の分布調査からわかったこと～」\* 村岡日和、板谷柊吾、川中波、高松遥大（三田祥雲館高校）

「タイリクバラタナゴの鍵刺激は？」\* 吉澤梨桜、山本莉里花（大阪府立富田林中学校）

「なぜマミズクラゲはフラストレを形成するのか？」\* 谷野祐稀、森山颯太、平山裕太（大阪府立富田林高校）

「草刈りがヒゴスミレの生育に与える有効性」\* 齋藤礼暢、小川滉太（新津高等学校）

「花酵母を用いた生分解性プラスチックの分解を目指して」\* 榎戸萌、久山さくら、高橋璃珠（清心女子高等学校）

##### 【審査員特別賞】

「ツバメの巣の接着強度を高める要因について」\* 山口友雅、中嶋蒼一郎、早田最愛、上田善海（京都府立亀岡高等学校）

「フネアマガイの分布域と生態」\* 佐伯峻佑（開智高等学校）

「都市緑地2地点のカメムシ相」\* 岸田知磨（武蔵高等学校）

「飼育下でのカワムツとヌمامツの密度と攻撃行動の関係」\* 三浦萌香、島田蒼空、堀田菜葵（県立宝塚北高等学校）

「火山地帯に生息するアリの生態」\* 三瓶晃太、高槻遼大（国分寺高等学校）

「外来のアメリカツノウズムシが尾を切る理由」\* 高橋櫻（大阪府立富田林高校）

「河川横断物とモクスガニの遡上」\* 田中宏樹（金光学園高等学校）

「ため池における水生植物と水鳥との相互関係について」\* 天野愛、児玉明希保（秋田中央高等学校）

「ヒガンバナから除草剤をつくる」\* 金井志耕（県立

春日部高等学校）

「高校生の手による身近な河川の自然再生について」\* Asahi TOKUDA, Keinosuke MIZUNO, Nanaho MIMURA, Kiichiro ISHIKAWA, Haruka KACHI, Eisuke ITO, Yuha SASAKI, Souma IWATA, Keisuke OGISO (Tajimi Highschool), Takaaki SAKAMOTO (ARRC), Terutaka MORI (ARRC), Tatsuya SAGA (Tajimi Highschool, Gifu University)

#### 英語口頭発表賞受賞者

##### < Fungi and microbes >

" Can soil microbes increase their diversity despite nutrient loss? —study on effects of cultivation in sub-Saharan Africa " \*Takamitsu OHIGASHI, Yoshitaka UCHIDA (Hokkaido University)

" Inference of microbial traits from massive metagenomic data: Development of bioinformatic pipeline and its applications to microbial communities " \*Kazumori MISE, Wataru IWASAKI (The University of Tokyo)

##### < Plant community · Landscape ecology >

" Analysis of the global patterns in canopy maximum height with respect to climatic factors and soil variables " \*Kei TACHIBANA, Yusuke ONODA (Kyoto University)

##### < Behavior >

##### 【Best Award】

" Reduced ant dependence of a range expanding myrmecophilous butterfly in the enemy-free space " \*Yui NAKABAYASHI, Issei OHSHIMA (Kyoto Prefectural University)

" Examining determinants of fecal particle size in Japanese macaques: The role of diet, toughness, age and sex in omnivore's chewing " \*Tianmeng HE, Wanyi LEE, Goro HANYA (Kyoto University)

##### < Plant ecophysiology · Plant population >

"Winter leaf reddening phenomenon: the long-term track of PRI and phenology changes in a temperate Japanese cypress forest at Kiryu Japan " \*Siyu CHEN, Yoshiko KOSUGI, Linjie JIAO (Kyoto University), Tatsuro NAKAJI (Hokkaido University), Hibiki NODA (NIES), Kouki HIKOSAKA (Tohoku University), Kenlo Nishida NASAHARA (University of Tsukuba)

"Difference in the climate factors between reconstructed annual leaf productions and stem radial increments in *Picea mariana*, evergreen conifer " \*Tomoko TANABE, Masako DANNOURA (Kyoto University)

##### < Evolution >

" Evolution of seasonal gene regulation by histone modifications " \*Haruki NISHIO (Kyoto University), Atsushi J. NAGANO (Ryukoku University), Tasuku ITO (Kyoto University), Yutaka SUZUKI (The University of Tokyo), Hiroshi KUDOH (Kyoto University)

##### < Biodiversity >

" Temporal  $\beta$ -diversity reveals the temporal scale difference in factors regulating zooplankton community structures:

an example in a small lake " \*Ishara Uhanie PERERA, Natsumi MARUOKA, Wataru MAKINO, Jotaro URABE (Tohoku University)

" Untangling lineages of freshwater copepods having a broad geographical range: The cases of *Cyclops vicinus* and *C. kikuchii* " \*Imane SIOUD, Wataru MAKINO, Jotaro URABE (Tohoku University)

#### < Ecosystem management >

" Combined impacts of windthrow and subsequent management on ecological resilience in cool temperate forests in Japan " \*Jing LI, Junko MORIMOTO (Hokkaido University), Satoshi SUZUKI, Toshiaki OWARI (Tokyo University), Takao NAKANE (PHOTEC Co.,Ltd.)

#### < Animal community · Animal population >

" Spatio-temporal variation in life-history traits of an amphidromous fish, ayu: changes in the traits after 19 years" \*Iki MURASE, Takahiro IRIE (The University of Tokyo), Kei'ichiro IGUCHI (Nagasaki University)

#### < Mathematical ecology · Conservation >

" The tragedy of the commons in plants: from the perspective of growth and resource allocation " \*Bo-moon KIM, Jun-Ichirou SUZUKI, Yuuya TACHIKI (Tokyo Metropolitan University)

" Impact of mixed cropping managements on soil microbial community composition and diversity—interaction of legume species and organic fertilizer— " \*Akari KIMURA, Yoshitaka UCHIDA (Hokkaido University)

### Ⅲ. 業務執行理事の選任について

2021年3月20日に2021年度第1回理事会が行われ業務執行理事が選任された。

業務執行理事（任期：2021年3月～2023年3月）

大塚 俊之（専務理事）

佐々木 雄大（庶務担当理事）

本庄 三恵（会計担当理事）

### Ⅳ. 功労賞受賞者

第19回日本生態学会功労賞

高村典子（国立環境研究所）

### V. 書評依頼図書（2020年10月～2021年5月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 飯田晶子・曾我昌史・土屋一彬著「人と生態系のダイナミクス 3. 都市生態系の歴史と未来」(2020) 184pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18543-0
2. 大塚泰介・嶺田拓也編「なぜ田んぼには多様な生き物がすむのか」(2020) 350pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-8140-0285-6
3. 金子弥生著「里山に暮らすアナグマたち フィール

ドワーカーと野生動物」(2020) 248pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060241-9

4. 棟方有宗・北川忠生・小林牧人編著「日本の野生メダカを守る 正しく知って正しく守る」(2020) 160pp. 生物研究社 ISBN:978-4-909119-17-9
5. マヤ・セーヴストロム著 井上舞訳「どうぶつおやこ図鑑」(2020) 112pp. 化学同人 ISBN:978-4-7598-2049-2
6. 大西文秀著「ヒト自然系からの未来警鐘」(2019) 220pp. 大阪公立大学共同出版会 ISBN:978-4-909933-04-1
7. 堀正和・山北剛久著「人と生態系のダイナミクス 4 海の歴史と未来」(2021) 176pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18544-7
8. 小林牧人・藤沼良典著「理系研究者がハッピーな研究生活を送るには」(2021) 128pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1665-9

### Ⅵ. 寄贈図書

1. 「北海道爬虫両棲類研究報告書 Vol.8」(2021) 32pp. 北海道爬虫両棲類研究会

## 書評

平野恭弘・野口享太郎・大橋瑞江編(2020)「森の根の生態学」共立出版 376pp. ISBN: 978-4-320-05813-2 価格 4,400円(税込)

根の役割を、我々は過小評価していないだろうか。本書は、樹木根の実態を我々にありありと見せ、その生態系における重要性に多くの気づきを与える。そして、根研究の奥深さを我々に知らしめる。

樹木根は生態学的重要性が明白でありながら、これを体系的に学べる和書はほとんど無かった。本書は樹木根について、基礎から応用まで、まさに根を張り巡らすように慎重に、広範に、かつ系統立ってまとめ上げられている。特に、基礎から始まり徐々に発展的な内容へと広がる丁寧な構成は、学生や、私のような根を専門としていない初学者による学びを大いに助ける。こうした配慮からも、編者たちの根研究の裾野を広げたいという強い思いがひしひしと伝わる。著者陣は、生態学会のみならず森林学会や根研究学会においても先導的な役割を担うメンバーで固められており、どの章にも解説の端々に根への熱い思いが垣間見える。まえがきにもあるとおり、「渾身」の一冊に、違いない。

本書は、上述の通り、基礎から積み上げながら読める構成となっている。第3章までは樹木根の実態とそれが樹木の成長と機能に関わる基本的な仕組みを中心に紹介している。第4章以降では、環境変動、災害、生態系サービスなど、応用的な課題の中で根がどのような役割、そして重要性を持つかについて幅広く話題を展開している。第3章までで全体の3分の2ほどのページが割かれており、基礎に重きが置かれた配分となっている。

内容を詳しく見ていくと、まず第1章では、樹木の根の構造、分布、形態、バイオマス、様々な生態系での状態など、根の存在実態がじっくり解説されている。根系のタイプや、細根の分類、根の分布型、地上部とのバランスなど、陸上生態系に関わる者なら専門に関わらず知っておきたい内容がずらりと並ぶ。第2章では、根の成長、動態、共生といったより生態学的な側面が、具体的な実例とともに示されている。組織・細胞レベルでの成長様式の詳細や根の分枝パターン、根を通じた物質移動、細根の形質、根の季節動態、他植物根や微生物との関わり、といった生態学的话题は、どこか地上部の話にも似た親近感と、地下部ならではの新鮮さが入り混じっている。第3章では、水や元素に着目した物質動態、根のターンオーバーや根の分解・土壌化を含む炭素動態との関わりなど、陸上生態系における樹木根の位置や実質的役割が物質循環の観点から示されている。さらに、そうした根を通じた森林内動態を調査、解析するための手法も具体的に示されており、根研究を直に感じられる。

第4章では、気候変動や環境ストレスに対する根の応答を中心に、今日的な学問的課題における根の話題を提供している。大気中二酸化炭素濃度上昇や地温上昇などの地球規模の環境変動に加え、山火事、林内雨遮断、土壌酸性化、窒素飽和といった森林生態系でよく見受けられる事象についても掘り下げているのが興味深い。第5章では、根の特質とも言える減災機能に着目している。斜面地が多く、集中豪雨や地震も頻繁な我が国にとっては大変重要な視点であり、根研究の応用の広さがわかる。そして終章では、樹木の根に関する知見と社会との関わりやその今後の展望を論じ、締めくくっている。

全体を通じて本書からまず感じられるのは、なかなか目にはできない樹木根のリアルな実態である。解説のみならず豊富な図や写真、研究結果を用いながら、まるで地上部のことのように明朗に語られている。そして、地上部にはない根の特質や根の事情が事細かに記されている。さらに本書から浮かび上がるのは、樹木根の生態系における役割の多さとその重要性である。根というと、植物体の支持や水・養分の吸収という役割がまず挙げられよう。しかし、本書で語られる根の役割はそれに全くとどまらない。水・養分以外にもあらゆる物質の動態(吸収・貯蔵・放出)に関与し、隣接する植物の根や根圏にいる無数の土壌生物たちと折り合いをつけ、さらに周囲を覆う非生物環境との関係を切り盛りする、そんな無数の重要な役割をこなす根の逞しい姿である。移動することのできない陸上植物にとってこうした根のマルチな役割や機能はそのまま生命線となり、多年を生き延びなければならぬ樹木とあればその重要度は計り知れない。そして、それは樹木という個体を守るのみならず、生態系や地球環境の保全にも繋がっている。

根は生態系の中でも大きなブラックボックスと云われる。ただその一方で、本書から分かるように、知見は驚くほどに積み上がってきている。そして、植物個体、群落、生態系、地球環境、様々な単位で語れることもここまで増えてきた。多くの人とそれを共有し共に深めていきたい、そんな書き手の心が見えるような気がする。本書は、そんな根研究へのいざないではないだろうか。

(酪農学園大学農食環境学群 保原 達)

一般社団法人日本生態学会  
役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長） 湯本 貴和 2020.3 ~ 2022.3  
業務執行理事  
（副会長・次期会長候補）

宮下 直 2020.3 ~ 2022.3  
（専務理事） 大塚 俊之 2021.3 ~ 2023.3  
（庶務担当） 佐々木雄大 2021.3 ~ 2023.3  
（会計担当） 本庄 三恵 2021.3 ~ 2023.3  
（広報担当） 中川弥智子 2020.3 ~ 2022.3  
（出版担当） 久米 篤 2020.3 ~ 2022.3  
（男女共同参画 / キャリア支援担当）  
木村 恵 2020.3 ~ 2022.3

理事（2020.3 ~ 2022.3）

内海 俊介	鏡味 麻衣子
北島 薫	近藤 倫生
辻 和希	東樹 宏和
中野 伸一	西廣 淳
宮竹 貴久	村岡 裕由
吉田 丈人	和田 直也

監事 齊藤 隆 2020.3 ~ 2022.3  
永松 大 2021.3 ~ 2023.3

代議員（2019.12 ~ 2021.12）

全国代議員	赤坂 宗光	丑丸 敦史
	内海 俊介	鏡味麻衣子
	粕谷 英一	岸田 治
	黒川 紘子	近藤 倫生
	瀧本 岳	辻 和希
	東樹 宏和	中野 伸一
	西廣 淳	日浦 勉
	吉田 丈人	
地区代議員	小泉 逸郎（北海道）	彦坂 幸毅（東北）
	鈴木 牧（関東）	石井 博（中部）
	北島 薫（近畿）	
	宮竹 貴久（中国・四国）	
	細川 貴弘（九州）	

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief	陶山 佳久
Deputy Editor-in-Chief	鈴木準一郎
Associate Editors	
in-Chief	江成 広斗 大澤 剛士
	長田 典之 鏡味麻衣子
	川津 一隆 小杉 緑子
	木庭 啓介 小林 真
	瀧本 岳 玉木 一郎
	兵藤不二夫 深澤 圭太
	牧野 渡 宮澤 真一
Ming Dong	Stephanie A. Bohlman

Zhijun Ma  
Handling Editors

飯田 碧  
市栄 智明  
今井 伸夫  
大橋 瑞江  
梶 光一  
上條 隆志  
工藤 岳  
小林 和也  
阪口 翔太  
佐藤 一憲  
高木 俊  
角田 裕志  
中路 達郎  
西村 欣也  
日浦 勉  
福井 大  
松井 一彰  
松崎慎一郎  
安田 仁奈  
横川 太一  
高田 宜武

Bo Li

石川 尚人  
稲垣 善之  
大園 享司  
岡部貴美子  
角谷 拓  
北村 俊平  
工藤 洋  
斎藤 琢  
佐々木雄大  
佐藤 拓哉  
高田まゆら  
仲澤 剛史  
中村 誠宏  
半場 祐子  
平田 竜一  
藤井 佐織  
松尾奈緒子  
村上 正志  
山尾 僚  
馬場 友希

Min Cao	Jae Chun Choe
Franck Courchamp	Stuart J Davies
Guillaume Echevarria	Jingyun Fang
Yunting Fang	Jan Frouz
Raghavendra Gadagkar	Rhett D. Harrison
Brenden Holland	Sun-Kee Hong
David W. Inouye	Eun-Shik Kim
Andrew M. Lohrer	Tsewang Namgail
Ariel Noveplansky	Pil Sun Park
Jeremy J. Piggott	Nishanta Rajakaruna
Serena Rasconi	Sergio R. Roiloa
Stephen D. Sebestyen	Bo Song
Janne Sundell	Cindy Q. Tang
Arndt Telschow	Edward Vargo
Ping Xie	

日本生態学会誌編集委員会（2020.1 ~ 2022.12）

編集委員長	永光 輝義	
編集幹事	安房田智司	相場慎一郎
	島野 光司	小林 剛
編集委員	伊東 明	村岡 裕由
	三宅 崇	高田 宜武
	箱山 洋	土田 浩治
	村上 貴弘	東樹 宏和
	佐久間大輔	和穎 朗太
	笠原 玉青	保原 達
	大澤 剛士	松林 圭
	立木 佑弥	山浦 悠一
	草刈 秀紀	嶺田 拓也
	富田 涼都	白川 勝信

保全生態学研究編集委員会 (2021.1 ~ 2023.12)

編集委員長 小池 文人  
 編集幹事 丑丸 敦史 西廣 淳  
 編集委員 天野 達也 赤坂 宗光  
 石濱 史子 市野川 桃子  
 岩井 紀子 大澤 剛士  
 岡野 隆宏 片山 直樹  
 角谷 拓 金子 信博  
 河口 洋一 岸本 康誉  
 北村 亘 楠本 良延  
 小池 伸介 五箇 公一  
 小山明日香 今藤 夏子  
 佐伯いく代 佐々木 雄大  
 鈴木 覚 曾我 昌史  
 高田まゆら 立原 一憲  
 露崎 史朗 東城 幸治  
 戸田 光彦 中濱 直之  
 根岸淳二郎 松崎慎一郎  
 森田健太郎 山浦 悠一  
 横溝 裕行

吉田 正人：環境政策  
 (自然公園/種の保存法)  
 村上 興正：環境政策 (外来種)  
 関島 恒夫：  
 気候変動対策と環境影響評価

将来計画専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長 佐竹 暁子  
 副委員長 酒井 章子  
 辻 和希 巖佐 庸  
 粕谷 英一 石井 勲一郎  
 田中 健太 小泉 逸郎  
 立木 佑弥 三木 健  
 北島 薫 森長 真一  
 塩尻 かおり 彦坂 幸毅  
 黒川 紘子 土居 秀幸  
 山道 真人 大串 隆之  
 佐藤 拓哉 石川 麻乃  
 鈴木 貴俊  
 オブザーバー 大竹 裕里恵

自然保護専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長 和田 直也：中部  
 副委員長 奥山 雄大：関東  
 大久保 奈弥：海洋  
 幹事 神山 智美：環境法  
 地区選出委員

露崎 史朗：北海道  
 長谷川 功：北海道  
 星崎 和彦：東北  
 黒沢 高秀：東北  
 亘 悠哉：関東  
 増田 理子：中部  
 野間 直彦：近畿  
 中井 克樹：近畿  
 岡 浩平：中国・四国  
 伊谷 行：中四・四国  
 久保田 康裕：九州  
 高嶋 敦史：九州  
 平田 令子：九州

専門別委員  
 増沢 武弘：高山・亜高山  
 竹門 康弘：陸水  
 加藤 真：海洋  
 清水 善和：島嶼  
 久保田 康裕：熱帯・亜熱帯  
 横畑 泰志：寄生物  
 阿部 晴恵：遺伝子  
 常田 邦彦：鳥獣管理  
 矢原 徹一：海外渉外  
 安溪 遊地：エネルギー問題  
 角野 康郎：湿地  
 水谷 瑞希：MAB  
 五箇 公一：環境行政 (外来種)

生態学教育専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長 畑田 彩  
 副委員長 中田 兼介  
 非教育学部系枠：  
 嶋田 正和 西脇 亜也  
 教育学部系枠：  
 丑丸 敦史 中井 咲織  
 平山 大輔 三宅 崇  
 高校教員枠 佐賀 達矢 宮田 理恵  
 博物館枠 小林 誠 澤邊(中村)久美子

大規模長期生態学専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長 大手 信人  
 石原 正恵 伊東 明  
 内海 俊介 黒川 紘子  
 木庭 啓介 中野 伸一  
 中村 誠宏 松崎慎一郎  
 村岡 裕由

生態系管理専門委員会 (2020.4 ~ 2022.3)

委員長 西廣 淳  
 副委員長 鎌田 磨人  
 幹事 橋本 佳延：  
 キャパシティビルディング部会担当  
 西田 貴明：調査・提言部会担当  
 キャパシティビルディング部会：  
 山下 慎吾 白川 勝信  
 矢原 徹一 大脇 淳  
 赤石 大輔 伊藤 浩二  
 上野 裕介 上崎 聰敏  
 調査・提言部会：  
 高村 典子 松田 裕之

中村 太士	岩崎 雄一
大澤 隆文	小笠原奨悟
高川 晋一	佐々木章晴
中静 透	古田 尚也
吉田 丈人	

発表編成部会	榎木 勉	富松 元
	高見 泰興	伊津野彩子
	赤坂 卓美	源 利文
	森 英樹	兵藤不二夫

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

佐藤 拓哉	辻 和希
半場 祐子	小野田雄介
鏡味麻衣子	佐竹 暁子

英語口頭発表部会	遊	辰巳 晋一
	深澤 大輔	照井 慧
	杉浦 亮太	宇野 裕美
	青柳 悠太	入谷 亮介

大会企画委員会

委員長	高橋 佑磨
副委員長	細 将貴
運営部会	潮 雅之

才木真太郎
高野（竹中） 宏平
橋本 洸哉
野下 浩司
酒井陽一郎

オブザーバー	藤井 佐織	山道 真人
	天野 達也	高須賀圭三

野外安全管理委員会

委員長	石原 道博	2020.4 ~ 2022.3
	鈴木 準一郎	2020.4 ~ 2022.3
	粕谷 英一	2020.4 ~ 2022.3
	北村 俊平	2020.4 ~ 2022.3
	大館 智志	2021.4 ~ 2023.3
	飯島 明子	2021.4 ~ 2023.3
	奥田 昇	2021.4 ~ 2023.3

シンポジウム部会

小山明日香	吉村真由美
東 若菜	井坂 友一
今井 伸夫	大館 智志
児島 庸介	小林 知里
阿部 真人	磯村 尚子

キャリア支援専門委員会（2020.4 ~ 2022.3）

委員長	上野 裕介	
副委員長	木村 恵（男女共同参画）	
	鈴木 牧（キャリア支援）	
	河内 香織	小山 耕平
	鈴木 智之	曾我 昌史
	西田 貴明	沼田 真也
	水野 晃子	森田健太郎
	高田まゆら	成田 あゆ
	高野（竹中） 宏平	宮脇 成生
	東樹 宏和	

ポスター部会

服部 充
江川 知花
清水 加耶
土岐和多瑠
中西 希
島田 直明
平山貴美子
平野 尚浩

オブザーバー	可知 直毅	黒瀬奈緒子
	塩尻かおり	富田 基史
	半場 祐子	三宅 恵子
	別宮（坂田） 有紀子	荒木希和子
	中坪 孝之	宮下 直

高校生ポスター部会

望月 昂
城野 哲平
勝原 光輝
佐賀 達矢
中原 亨
立木 佑弥
中村 圭司

中浜 直之
片山 直樹
宮崎 佑介
坂田 ゆず
鏡味麻衣子
酒井 聡樹
高木 俊



## 京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research  
Kyoto University

京都大学生態学研究センター  
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3  
Tel:(077)549-8200 (代表), Fax:(077)549-8201  
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University  
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,  
520-2113, Japan  
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

### 2021年度センター活動予定

生態学研究センターにおける2021年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

なお、新型コロナウイルスの影響により本稿に掲載されている予定については変更の可能性があります。ご了承ください。

#### 1. プロジェクト

JST 戦略的創造研究推進事業 (CREST) (1件)・創発的研究支援事業 (1件)、ムーンショット型研究開発事業 (NEDO) (1件)、科学研究費助成事業による研究 (34件)、民間財団寄附金による研究 (8件) などが進められている。

#### 2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

#### 3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2021年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、1件の国際共同研究、6件の共同研究a、4件のワークショップ、2件の研究集会を採択した。研究集会とワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

#### 4. 生態研セミナー

毎月第三金曜日に、センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催している。本セミナーは京都大学生態学研究センターにて開催し、会場への直接参加による視聴 (会場への道順はセンターのホームページ参照) と合わせて、講師の同意が得られる場合には Web 上でもセミナーのリアルタイム配信を行なっている。

ただ、この間は COVID-19 の影響により会場で講演を行うことは中止し、Zoom を用いたオンラインセミナーとしてのみ開催している。これについても Web 配信に準じて扱い、講師の同意が得られる場合には外部に公開している。詳細についてはセンターホームページでご確認ください (なおオンラインでの視聴には事前申込が必要です)。

#### 5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に2回 (7月、1月) 発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

#### 6. オープンキャンパス、公開授業

京都大学では、遠隔地教育研究施設による公開講座等を集中して実施する京大ウィークスを毎年行っている。センターはその一環として、一般公開「学校で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

#### 7. 共同利用施設

大型分析機器：DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置 (元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置 (熱分解型元素分析計)、GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench II (自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、元素分析計、GC/C を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計2台が稼働している。



琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼動しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：陸域モジュール、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CERの森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：木庭

観測船関係：合田

シンバイオトロン関係：高林

実験圃場林園関係：酒井

## 8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

### 2021年度 国際共同研究・共同研究 a・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧

申請者	所属	申込内容	研究課題
Antony Dodd	Dept. Cell & Developmental Biology, John Innes Centre, Norwich, UK	国際共同研究	Molecular mechanisms of circadian gating in plants across the seasons
清水（稲継）理恵	Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	異質倍数体植物の遺伝子発現パターンと気象情報からの表現型モデリング
鈴木 啓太	京都大学 フィールド科学教育研究センター（舞鶴水産実験所）	共同研究 a	冬春季の降水パターンが沿岸植物プランクトンに与える影響
荒木 希和子	立命館大学・生命科学部	共同研究 a	クローン性植物におけるエピジェネティック変異の継承とその適応的意義
三田村 啓理	京都大学・フィールド科学教育研究センター	共同研究 a	微量測定手法による脊椎骨の安定同位体比を用いたメコンオオナマズの食性解析
中谷 暢丈	酪農学園大学大学院・酪農学研究科	共同研究 a	洞爺湖内における食物網と水銀の生物蓄積課程におよぼす外来生物の影響解明
Antony Dodd	Dept. Cell & Developmental Biology, John Innes Centre, Norwich, UK	共同研究 a	Molecular mechanisms of circadian gating in plants across the seasons
中野 伸一	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2021
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2021
山内 淳	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	微生物を軸とした群集構造研究の統合とさらなる展開
門脇 浩明	京都大学 フィールド科学教育研究センター	研究集会	シカの脅威と次世代型森林再生のロードマップ研究集会 Ashiu Ecosystem Restoration (AER) Project
西野 麻知子	元・びわこ成蹊スポーツ大学	研究集会	アナンデルの極東旅行から 100 年 - 琵琶湖の生物多様性はどこまで明らかになったか -

## センター関係者の動き

- 1) 研究員の辻かおる・林錦俊・HUANG, Yin-Tse が 1 月 31 日付で退職しました。
- 2) 特定准教授の宇野裕美が 3 月 31 日付で退職しました。
- 3) 特定研究員の西尾治幾が 3 月 31 日付で退職しました。
- 4) 外国人共同研究者の ZHENG, Jinsen が 3 月 31 日付で退職しました。
- 5) 伊藤公一・風間健宏・蔡吉・柴田あかり・清水華子・西野貴騎が 4 月 1 日付で研究員として採用されました。

#### ◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

#### 会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員(一般)	9500円	○	○
正会員(学生)	4500円	○	○
賛助会員	年会費 20000円／22000円	×	×

\*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。  
詳細はウェブサイトをご覧ください。

#### 【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 投稿権利は会員に限定されません
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

#### 【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・Ecological Research 8000円
- ・日本生態学会誌 600円\*\*
- ・保全生態学研究 2000円\*\*

\*\*非会員に向けた学会誌(冊子体)の定期購読料は、以下の年額となります。

- ・日本生態学会誌 9,000円
- ・保全生態学研究 5,000円

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631